

練馬区立小中一貫教育校大泉桜学園

検証報告書（案）

資料編

- | | | |
|---|----------------------------|-------|
| 1 | 大泉桜学園の検証に関わる意識調査（検証アンケート） | p 1 |
| 2 | 大泉桜学園の検証に関わるヒアリング（検証ヒアリング） | p 1 0 |
| 3 | 小中一貫教育校の施設整備に関するアンケート | p 3 4 |
| 4 | 大泉桜学園の部活動に関するアンケート | p 4 0 |

1 大泉桜学園の検証に関わる意識調査（検証アンケート）

（1）調査期間

平成26年7月上旬～下旬

（2）調査回答数

大泉桜学園児童生徒（3年生～9年生） 500名

大泉桜学園保護者（各家庭1名） 484名

大泉桜学園教員 29名

大泉桜学園学校関係者 29名

（学校評議員、学校応援団、町会、商店会、民生児童委員）

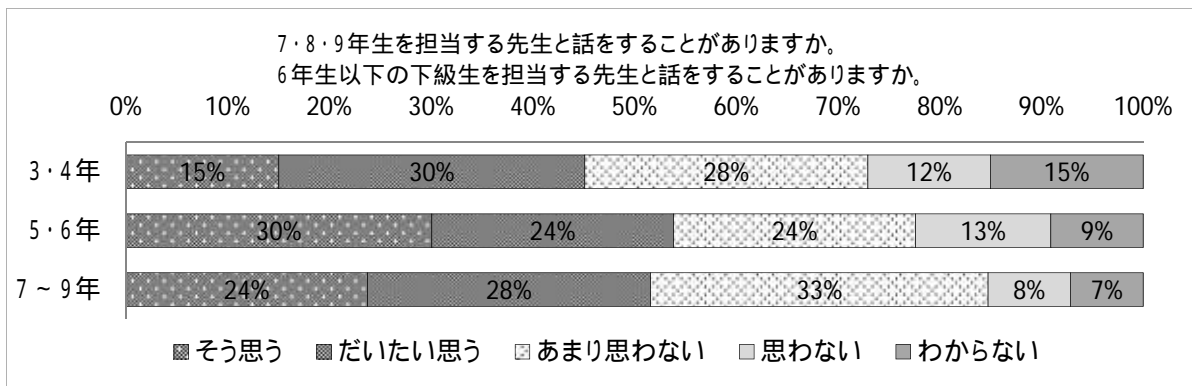
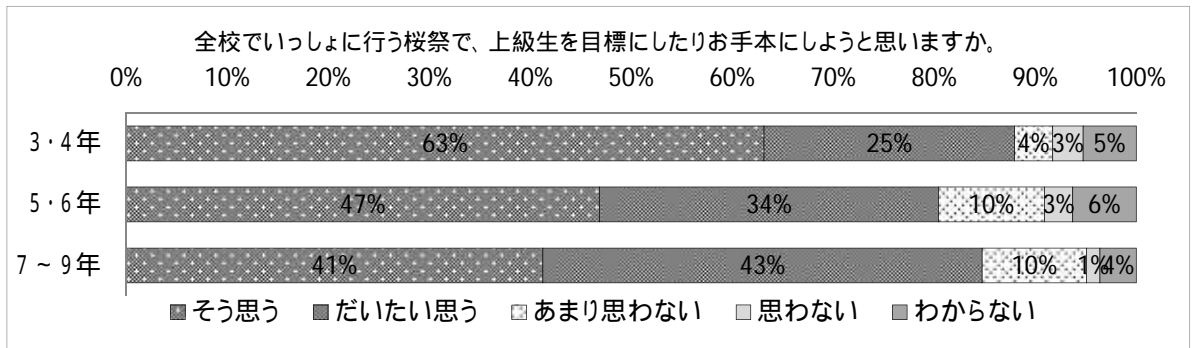
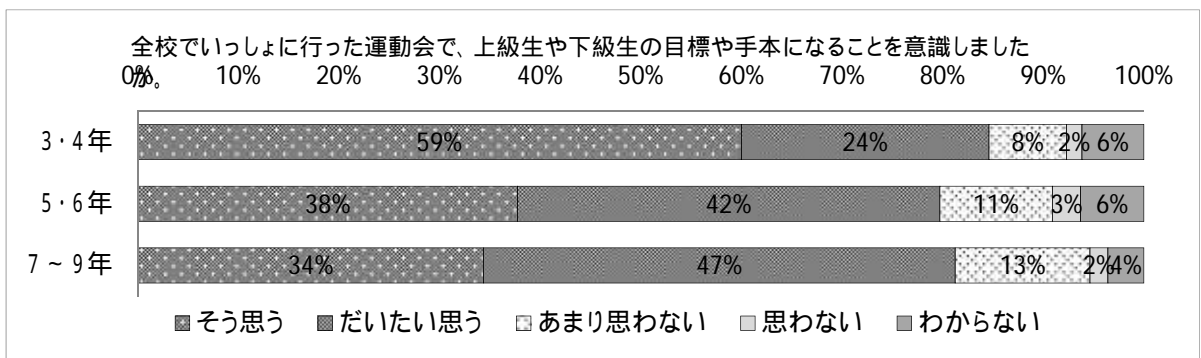
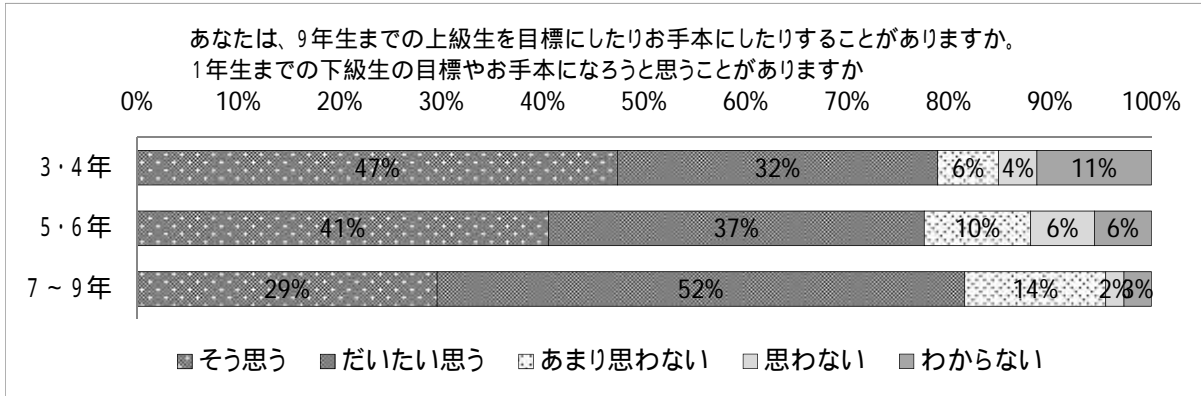
（3）調査票

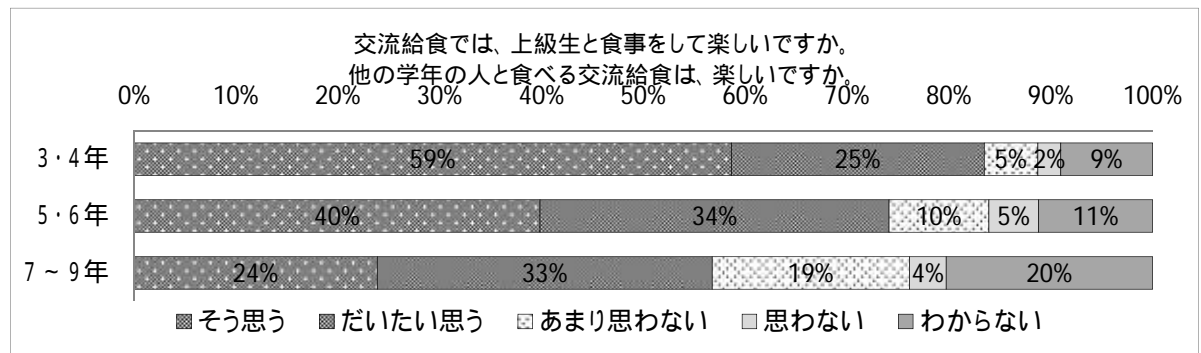
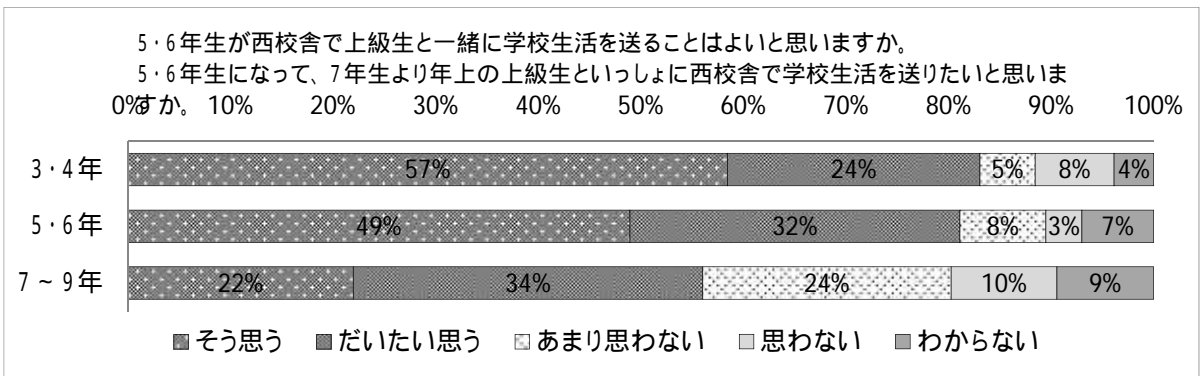
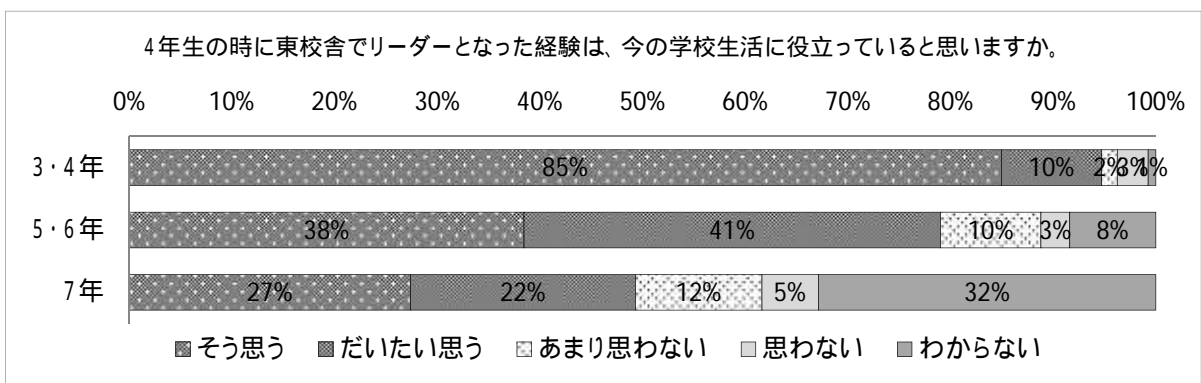
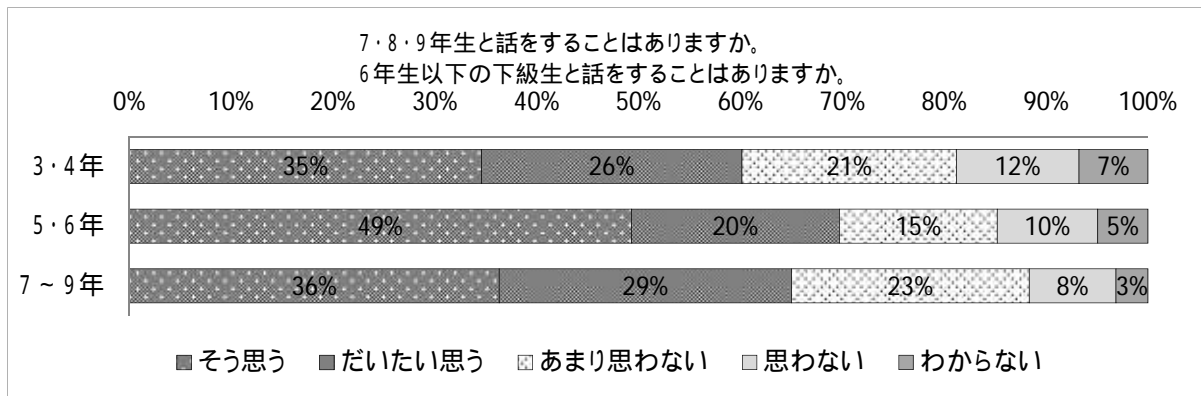
別紙のとおり

（4）集計における留意点

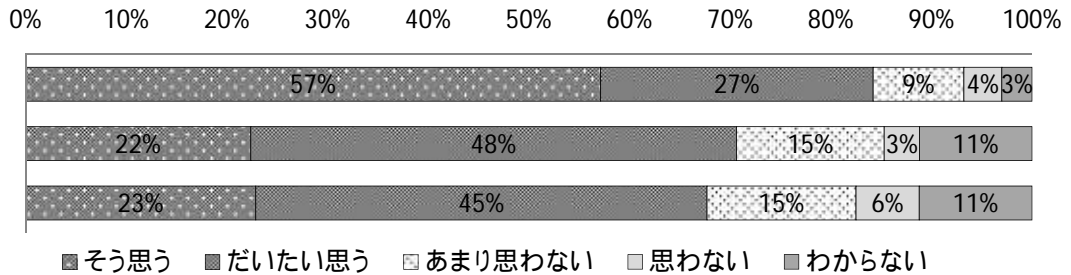
回答比率は、無回答を除く回答数を100とし、小数点以下を四捨五入しているが、合計を100とするため数を調整している場合がある。

大泉桜学園の検証に関わる意識調査(検証アンケート)【児童生徒】

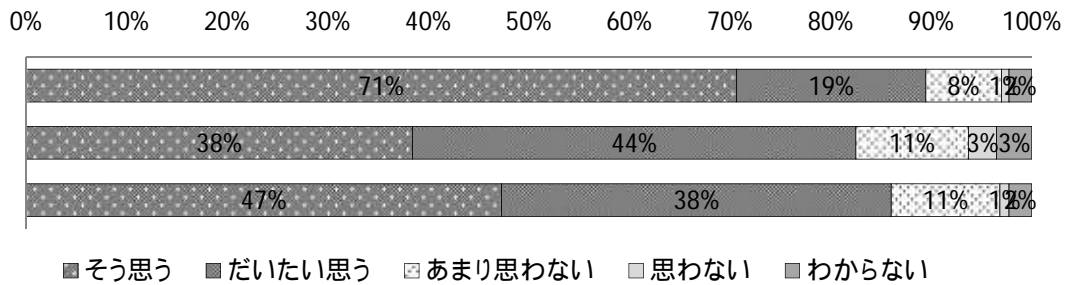




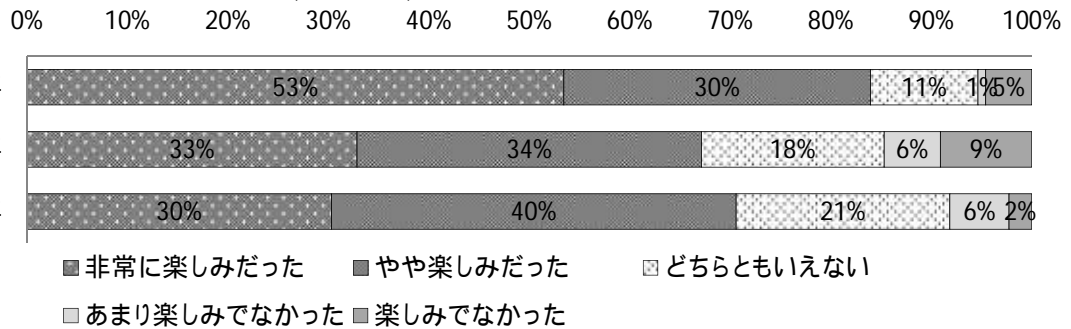
1～9年生の全員で行う集団下校訓練では、上級生として家の近くに住んでいる下級生をきちんと見守ることができていますか。



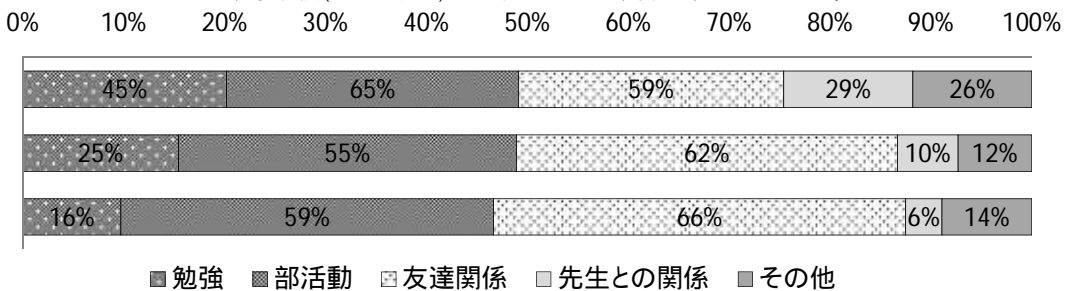
期別朝礼や期ごとの行事に積極的に参加していますか。



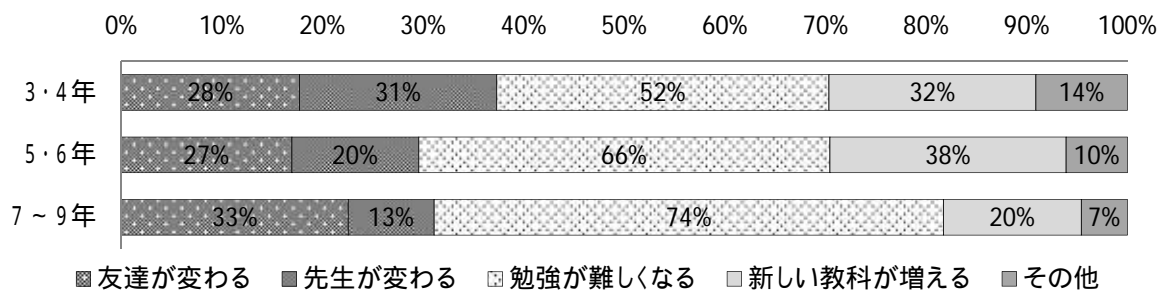
あなたにとって、中学校(7～9年生)に進学することは楽しみですか。
あなたが中学校(7～9年生)に進学したときの気持ちはいかがでしたか。



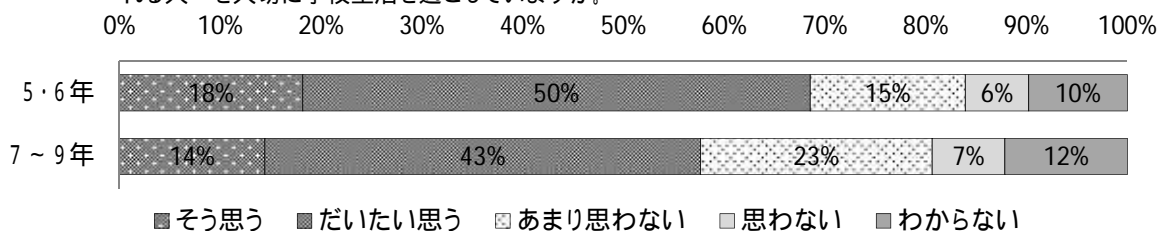
あなたにとって、中学校(7～9年生)に進学することで、楽しみなことは何ですか。
あなたにとって、中学校(7～9年生)に進学することで、何が楽しみでしたか。



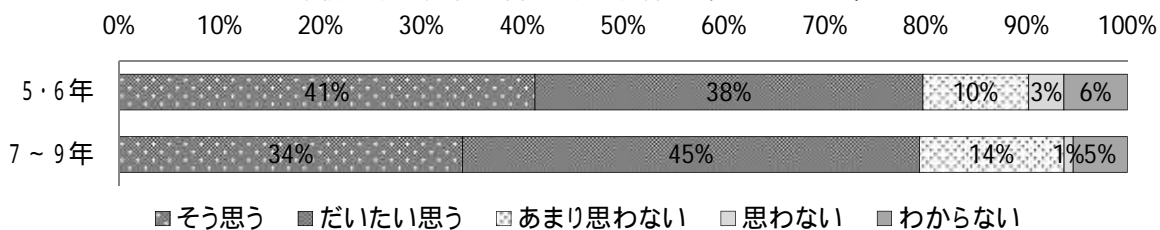
中学校(7～9年生)に進学することで、何が不安ですか。
あなたにとって、中学校(7～9年生)へ進学するときに不安に思ったことは何でしたか。



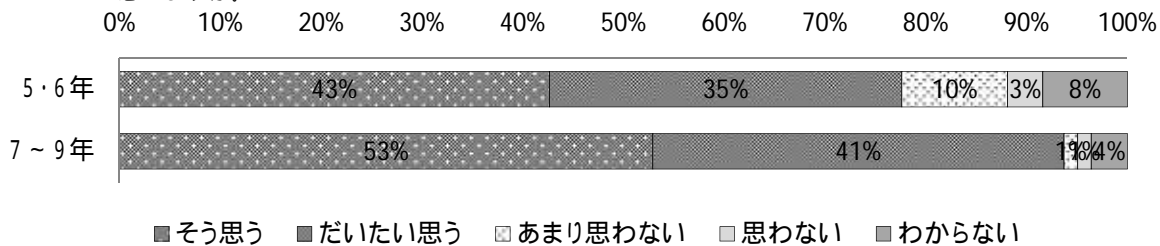
教育目標「桜学精神」- 桜の花よりも華ある人、桜の花よりも時機を知る人、桜の花よりも愛される人 - を大切に学校生活を過ごしていますか。



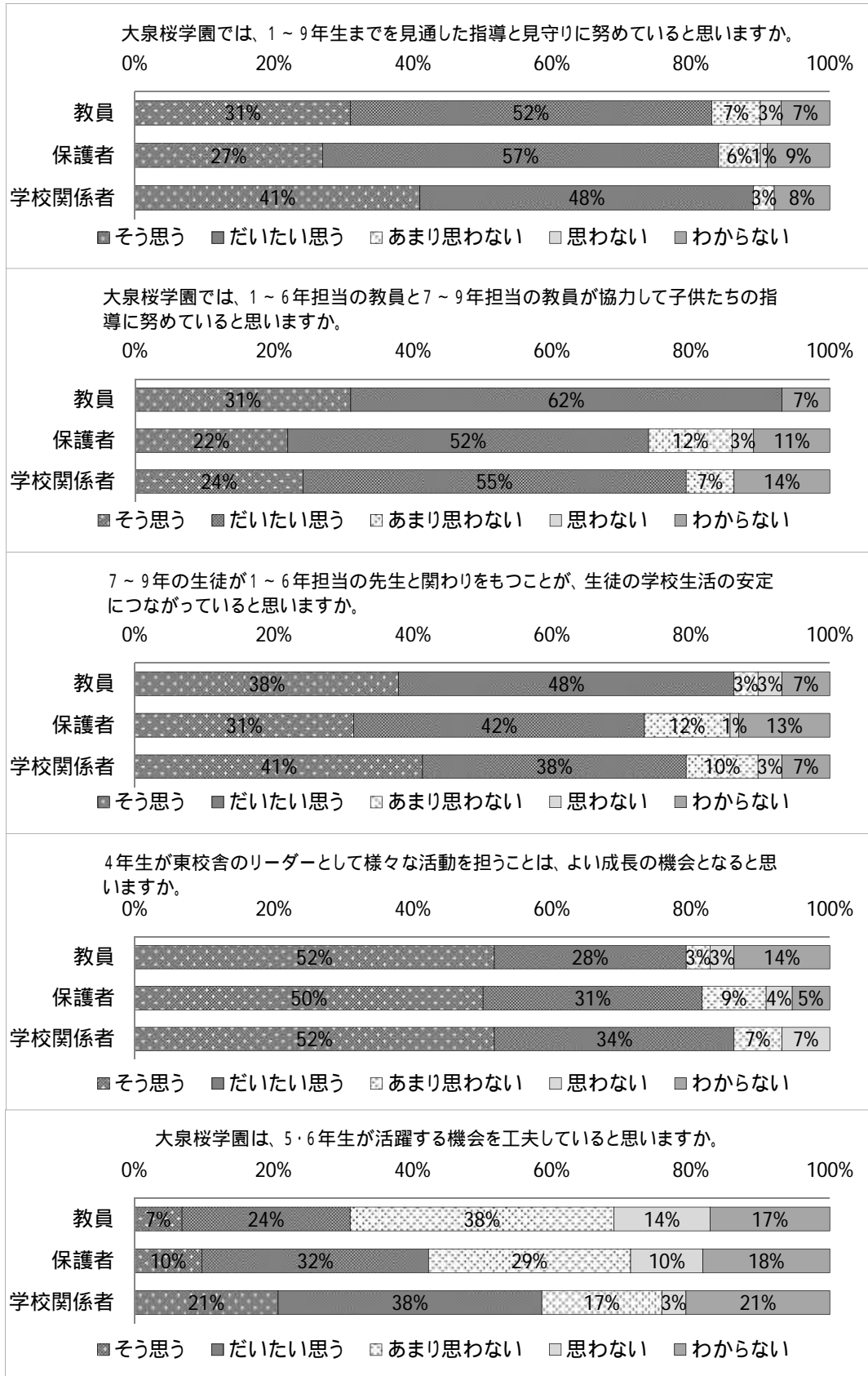
学校以外の場所でも自分の力を発揮しようと思いませんか。

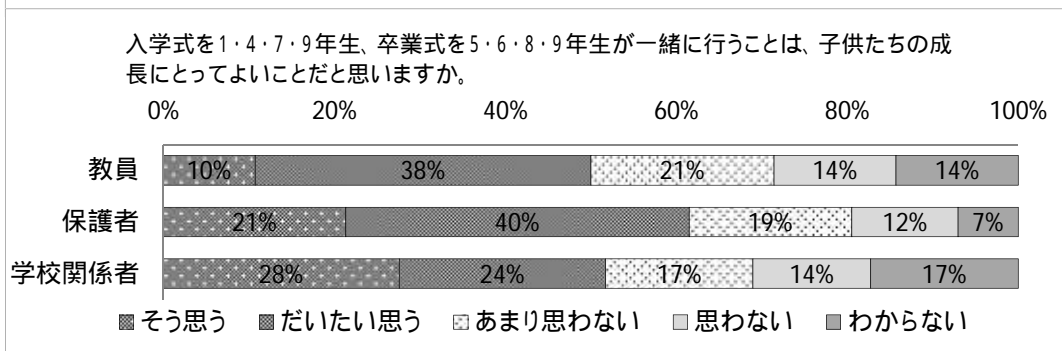
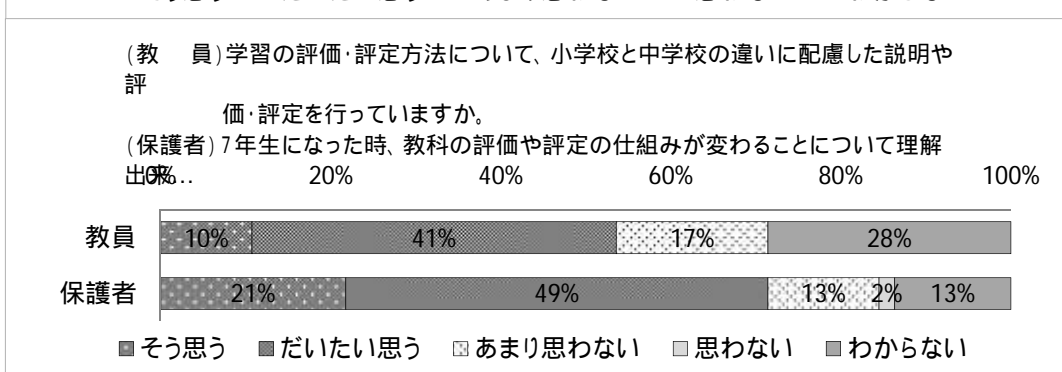
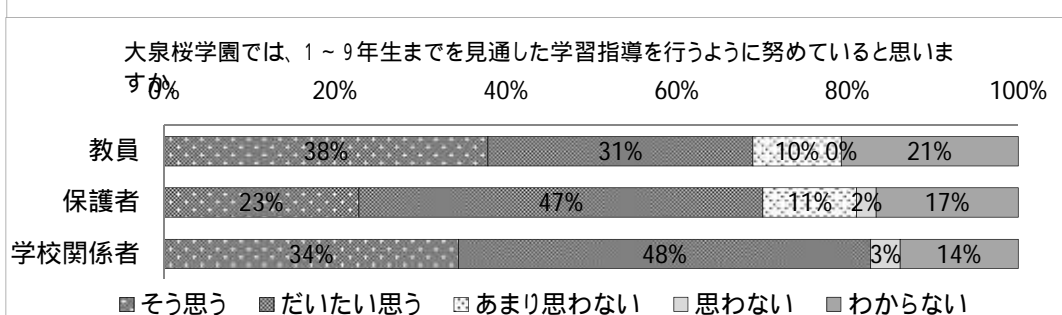
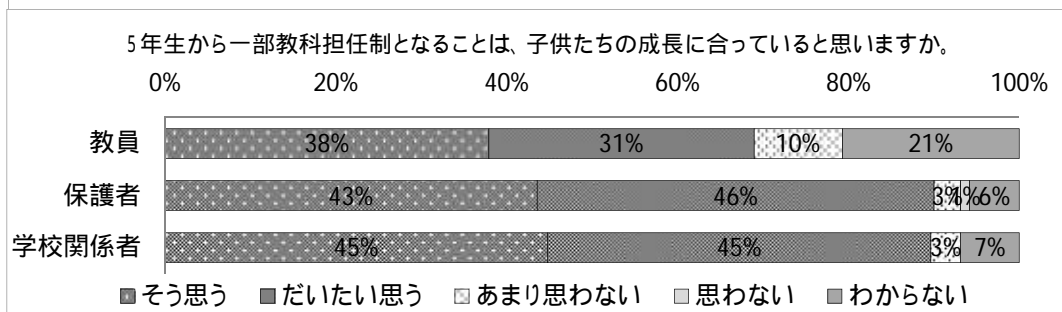
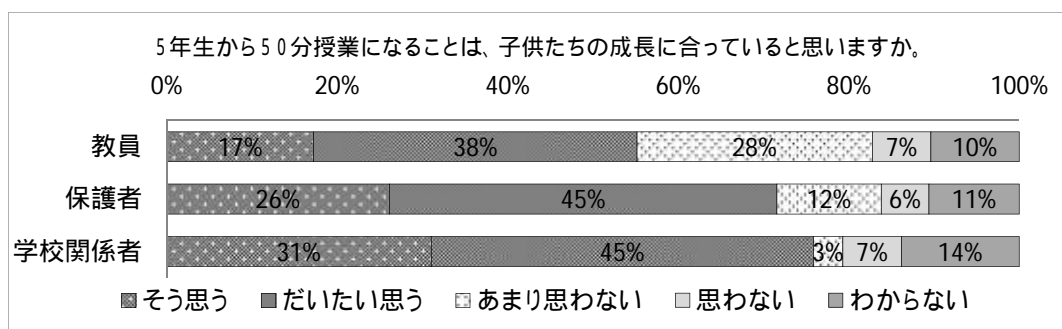


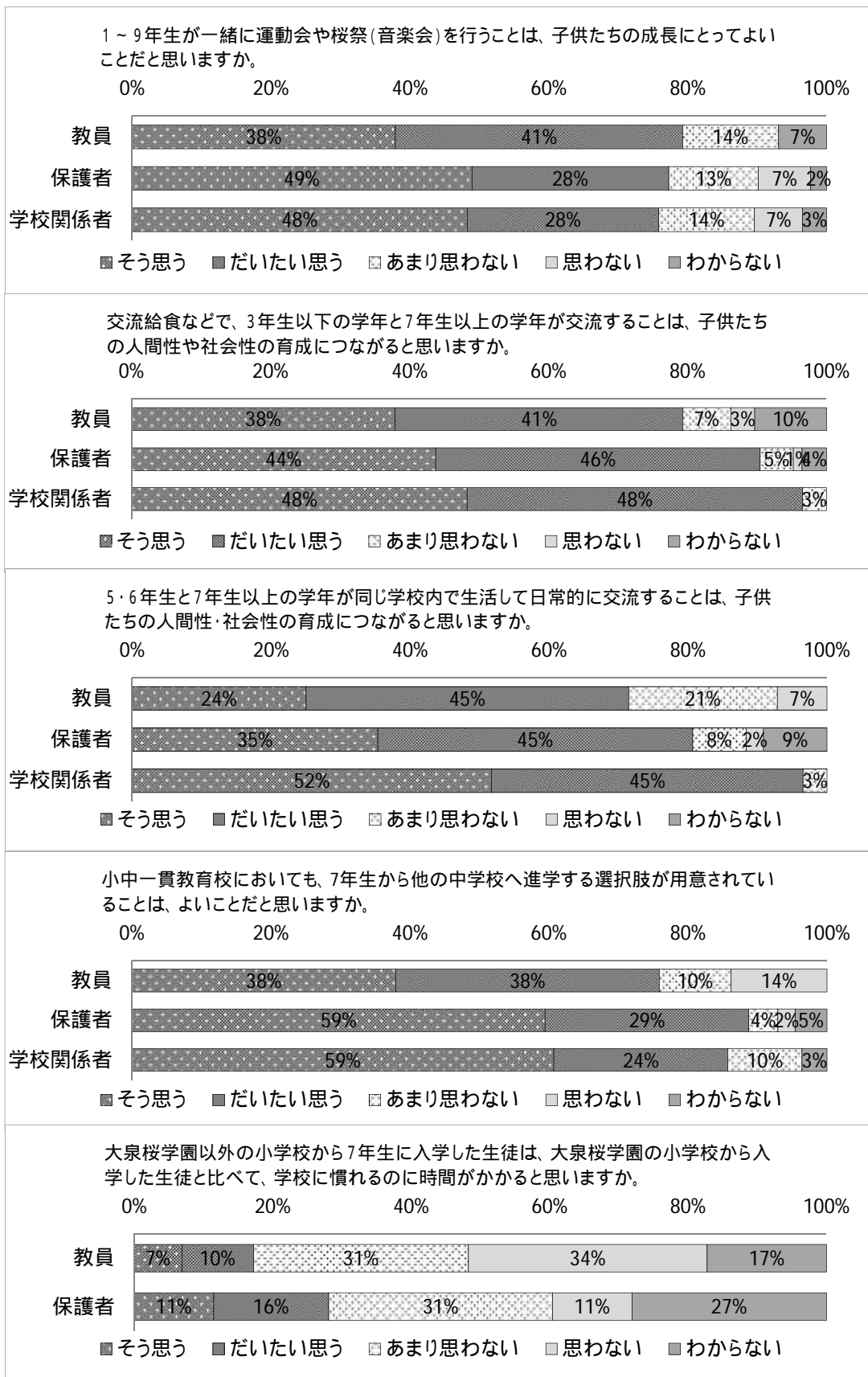
卒業後(中学生になって)も大泉桜学園で学んだことを基に自分の力を信じて努力し続けようと思いませんか。

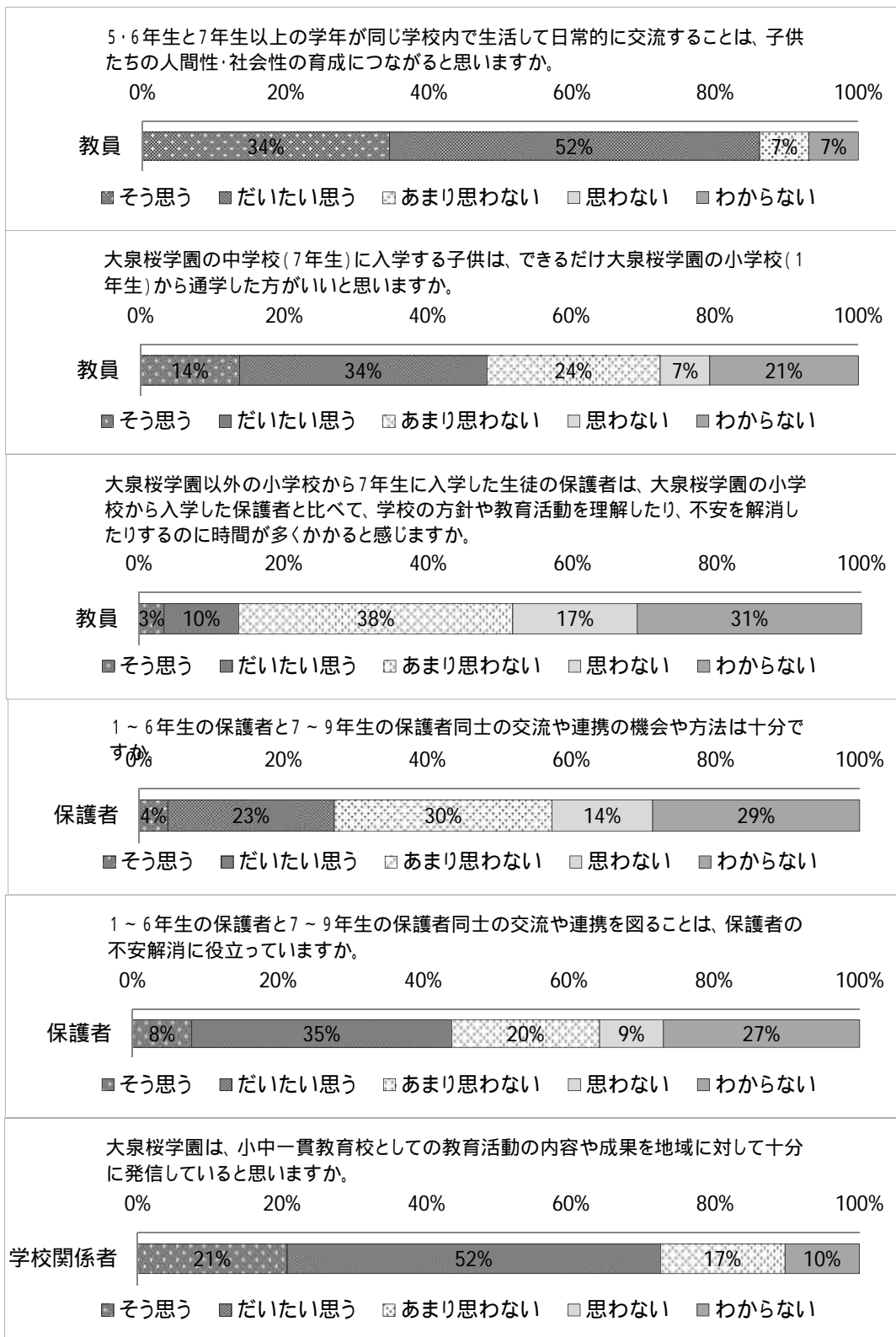


大泉桜学園の検証に関わる意識調査(検証アンケート)【教員・保護者・学校関係者】









2 大泉桜学園の検証に関わるヒアリング（検証ヒアリング）

（1）調査期間

平成26年7月下旬～9月上旬

（2）対象者

大泉桜学園教職員（他校への転出者含む）	20名
桜連絡会（PTA）役員	3名
町会長	3名
学校応援団	1名
民生児童委員	1名
児童生徒会役員	9名

（3）ヒアリング方法

対象者を2組にわけ、小中一貫教育校検証部会の部会長ならびに練馬区教育委員会統括指導主事がヒアリングを実施した。それぞれに記録者がつき、ヒアリングのやり取りを記録した。

（4）まとめにおける留意点

ヒアリングの記録は、部会長ならびに統括指導主事それぞれに記録者がついて、ヒアリングのやり取りをメモの形で記録した。発言内容をそのまま記録する形ではなく、発言の趣旨を尊重しながら要約して記録した。

大泉桜学園の検証に関わるヒアリング（検証ヒアリング） 教職員対象

9年間を見通した教育課程による学習指導および生活指導の充実

検証項目	内容	対象者
9年間を見通した学習指導	英語・外国語活動については、共通の理念が担当者同士で話ができればよいと思う。今の段階ではその程度しか言えない。中学校の英語と小学校の外国語活動では目的が違う。中学校の前倒しを5・6年生でやるわけではない。つながるものが何なのか、小学校と中学校の教員で互いに学べればよいと思う。コミュニケーションが共通のキーワードで、それをどう小中で具体化するかが重要である。	(中)教員
	現在、学習内容については「桜ベーシック」、学習規律や必要な能力については「桜スタンダード」というものをつくろうとしている。	(小)教員
	中学校でどういふことを大切にしているのかを聞いて、それを大切に小学校でも教えらる。例えば理科は、中学校では推察して結果をまとめることが大事なので、小学校でもそれに長く時間を取るようにしている。中学校の国語では語彙力が必要なので、それも早めにやっておく。	(小)教員
	技術科の指導については、図画工作との関連は意識して取り組んできた。図画工作担当の先生と話したり、道具の貸し借りをしたりしている。道具や機械の使い方、安全への配慮は小中でつながっている。小学校で学んできたことを理解でき、効率よく進められたと思う。	(中)教員
	通常の小・中学校と比べて気付いたことは、日常的に互いの取組が分かったことである。例えば、塗装を教えるにも、小学校でニスの塗り方を教えていると分かれば、中学校では違う塗装を教える。穴あけでも小学校でキリを使っていたら、中学校では機械を使ってみるなどということがスムーズにできたと思う。	(中)教員
	算数と数学の接続については、9年間を見通してどうつなげるかを小学校籍の教員と中学校籍の教員が連携して取り組んだ。どこで子供がつまづくかということを見ていくと、分数でつまづくことが多いことが分かった。分からないからいやだという子供の姿が見られた。このため、分数を理解させないといけないうことからは始まった。	(中)教員
	ベーシックカリキュラム、スタンダードカリキュラムの開発については、数量をメインにして、1年生から9年生を見通してどうやって定着させるかについて検討している。特に分数について行っている。	(中)教員
	職員室で話をすることでカリキュラムの理解が進む。小学校に教えに行くことで、カリキュラムの理解ができて教員にとっても子供にとってもメリットは大きい。	(中)教員
	算数では6年間の単元を洗い出し、例題を解かせ、つまづきが多いところを長い時間を割いてやるようにしようと思っている。	(小)教員
	算数のつまづきを把握することについて、1～6年生ではテストができているが、中学校では数学の担当教員が4人いて、テストでも自分のやり方があり、変えていくのは難しい。そこで、定期考査の結果分析をしている。	(小)教員
小中学校の教員が一緒になってよかったのは、互いの仕事内容が見えて人間として話ができた。ゴールは15歳、スムーズに指導していけるように小学校で押さえることが理解できた。読み書きそろばん、基本のところはとても大事であり、後から戻れない。どの学年になっても大事である。5、6年の担任をすると送り出した後の7～9年生が目の前にいるので、力が付けられてなくて申し訳ありませんという感じであった。中学校籍の教員には、小学校でも繰り返し指導してきたけれど定着しない面があるということも理解してもらえた。	(小)教員	
小学校で学習する範囲には、中学校で出てこない分野がある。例えば、小数と分数の場合、中学校ではほぼ分数で計算する。また、帯分数はほとんど中学校では出てこない。でも数の大きさを把握するために、小学校では教えなければいけない。4年生で帯分数をきっちりやって、5・6年生では仮分数でもよいということにしている。小数は数学では使わなくても、測定値として理科や体育で出てくるので、きっちりやらな	(小)教員	

検証項目	内容	対象者
	ければいけない。また、概数も社会では必要になるので、そういった点を中学校の数学担当教員と話している。	
4 - 3 - 2 の区切り	期では、4年生が中心になって学校をまとめていくことができることが分かったのが成果である。1～4年生だと、学年の差が近いので、1年生にも自らの成長の形が見えやすい。3・4年生は心の成長が大きいと思う。それで5年生に上がり自己有用感が高いままなので、児童生徒会の立候補も多い。自分たち教員の驚きが一番大きかった。	(小)教員
	4年生でリーダーを経験してきた6年生は前向きさが違う。リーダーを経験していると、またリーダーをやってもいいかと思う。7年生で飯ごう炊さんを実施した時はみんな前向きだった。役割があれば前向きになれるとも思った。	(小)教員
	大泉桜学園では、7年生に対する意識が違う。5・6年生へのリーダーだという意識がある。中学校1年生ではなく下の学年がいる7年生という意識をしていることが大きい。	(小)教員
	7年生には1期のリーダーとしていろいろな分野で先頭に立たせて役割を与えた。期別朝礼、防災訓練など役割を与えれば成長する。小学7年生と言われた幼い部分が変わってきた。	(中)教員
	8・9年生の成果として、9年生は学校全体のリーダーとしての活動がある。	(中)教員
	6年生を送る会をしてもらっていない学年もある。初めは4年生を東校舎から送る会である「虹を渡ろう」の取組はなかった。	(小)教員
	卒業式後のプレ7年生というのは何とも言えない。卒業式をやってもまたあるという気持ちになる。なくてもいいかとも思う。普通の授業で中学校籍の教員に教えてもらっているので、卒業式が終わった後にまたというのが課題だと思う。	(小)教員
	現在の1期の子供は開校時に東校舎を経験している子供だが、一般的な5・6年生としての学校生活を知らないので比較はできない。	(中)教員
	4年生の時に東校舎のリーダーとして引き上げて2期を迎えることについて、自分は東校舎の委員会活動が見えていない。東校舎から西校舎への接続性は難しい。委員会活動の役割は大きいですが、どう活かせるかが難しい。東校舎の放送委員会と西校舎の放送委員の比較や接続、発展がない。それぞれ担当の教員がいて活動している。時間がながい、それをやらないとつながらない。	(中)教員
	4年生に対する指導は、東校舎の頂点というところを意識した。4年生段階のリーダーシップのとり方があると思う。4年生では、自ら考えて行動するということまではいかない。	(小)教員
	4年生で力を付けるという指導計画をつくるので4年生で力は付くが、6年生ではだめなのか、4年生でそういう力を付けさせるのがいいことなかは分からない。4年生に6年生と同じものを求めてはいけませんが、やりようだと思った。4年生の委員会活動は1年間だけなので、ちょっと短い気がした。	(小)教員
	1期は4年生がリーダーということも教員も意識して指導している。2期は7年生の防災リーダーがあり、12月に向けて昨年度よりもグレードアップしている。課題は8・9年生をどうするかである。受験のこともあるし、卒業論文を書くという取組もある。協力したいと思う。	(小)教員
	4年生のリーダー性については、4年生でも委員会の委員長や縦割りの班長が意外にできる。しかも4年生は5・6年生よりやりたがるので、教師もやりやすい。	(小)教員
	4年生を担当した時は、いろいろ経験させようとした。校長から2分の1成人式ではない何かをしようという提案があり、「虹を渡ろう」という行事を企画した。その年は年間を通じて、学級通信の名を虹色通信にするなど、虹をテーマに取り上げた。6年生を指導するつもりで4年生を指導した。その後、自分も5年生を担当したので、4・5年生とつながりをつくれた。	(小)教員
	4年生は成長を感じる。いろいろなことができる。	(小)教員
	4 - 3 - 2の区切りについては、中学校選択制のことを考えると、3 - 3 - 3の区切りも選択の1つであると思う。	(中)教員
	プレ7年の授業について、他の小学校からの進学者もいるので中学校の学習内容を	(中)教員

検証項目	内容	対象者
4 - 3 - 2 の区切り	先取りした授業はできない。	
	4 - 3 - 2の区切りについては、9年間で健康観をどう身に付けさせるかということを考えなければいけないと思う。5・6年生を小学生扱いせず求められるのか、できるとしても求めることがいいことなのかは分からない。	(中)教員
	東校舎のリーダーを経験している子供は、飯盒炊さんでは頼もしかった。東校舎のリーダーを経験しているからとは言えないかもしれないが。	(小)教員
	4年生はやる気いっぱいなので6年生の委員会活動と違っていっぱい働く。3年生にも1～3月はインターンシップということで委員会のお試し体験をさせている。	(小)教員
	4 - 3 - 2の区分について、4年生は伸びているが5～7年生はもう少し耕さないといけないと思う。5年生で区切るというもある。	(小)教員
	小中一貫教育校では 期が脚光を浴びているが、それは違うと思う。 期が脚光を浴びない限り、小中一貫教育校は興味をもたれない。	(中)教員
	期の効果として、小学校から中学校への段差を緩やかにする効果は大きい。しかし、成長過程に必要なステップという面もある。どこにねらいをもつかによって違うと思う。	(中)教員
	中学校入学は子供たちにとって大きな変化になるはずで、よい部分は大きい。大泉桜学園の場合、再スタートできないという部分はあるだろう。	(小)教員
	段差を乗り越える力として 期をどうするかは課題である。飯盒炊さんや防災リーダーで7年生を 期のリーダーとする機会を設けようとはしているが、設定が難しい。中学校選択制の問題もある。通常の小学校よりも6年生段階でのリーダーの経験が少ない。今の8・9年生では、他の小学校から入ってきた生徒の方がリーダーになっている。	(中)教員
	5～7年生の指導が昨年度と今年度のテーマである。7年生の防災リーダーを始めたが、昨年度始めたばかりなので、まだ手応えは分からない。ただ、飯盒炊さんは7年生がリーダーでもできることが分かった。期のリーダーとなる機会をしっかりと用意しないといけない。	(小)教員
	9年間を通しての成長については、リーダーを3回経験するチャンスがある。大きな課題になったのは 期である。1～4年生は小回りがきくので結束が強くうまくいった。8・9年生も大丈夫だった。逆に 期は、5・6年生と7年生になってしまった。	(小)教員
	一番迷惑をかけてしまったのは今年の9年生である。大泉桜学園の開校時が6年生であり、9年間の間にリーダーを1回しかできない学年になってしまった。縦割りでの学年の面倒を見る機会が少なかった。7・8年生の頃は、リーダーを経験してこなかったことで、人前でマイクを持たされてももじもじしてしまったりして、担当教員が苦労したみたいである。	(小)教員
	4年生におけるリーダーの経験という点では、課題の多い子供が多いと昨年度はこれでリーダーをやってきたのかと疑問になることもある。学年のカラーがある。 期はすごく大切だがどうやったらいいのか考えてしまう。何を身に付けさせたいか共通理解がされていない。	(中)教員
6年生と7年生では、6年生の方がやはり子供っぽい。6年生の子供としてのよさにプラスして、大人に向けた殻を破ったよさ、つまり何ができていなければならないのかを指導していくことが必要であると思う。	(中)教員	
期の成長を支える取組は難しい。5～7年生という一つの形にプラスして、キャリア教育で将来の夢を語らせていくということが必要ではないかと思う。	(中)教員	
一般的な学校では、中学校には先生が恐いとか、先輩がいるとか、勉強の進度が早い等、身構えや覚悟があって入ってくる。小中一貫教育校になり、そのようなことは感じられない。	(中)教員	
9年間を見通した生活指導	5年生から6年生、7年生へと、ホップ・ステップで7年生へとつながって行って、小学生の目線ではなく8・9年生の目線になれば、学級崩壊のようなことが減少するように思う。	(中)教員

検証項目	内容	対象者
9年間を見通した生活指導	7年生の適応はすんなりいっていると思う。何かあった時に小学校の教員がいることが大きい。あとは、8、9年生をずっと見てきたことによる安心感もあると思う。	(小)教員
	上級生が穏やかになった。小さい子供に優しくしているからだろう。また、小学校の頃に指導を受けた教員がいることも影響しているように思う。	(小)教員
	5・6年生を受けもつと、中学校でどんどん成長していくのがみえる。	(小)教員
	小中一貫教育校の難点としては、1年生から4年生までに起こったトラブルが7年生から9年生まで引きずってしまうことがあり、本人の努力だけで困難な場合がある。悩みの種をもってしまった子供は、それを引きずることになるので、学校としてケアをしていく必要がある。	(中)教員
	小中一貫教育校の利点としては、長いスパンで見ている、それを生かして子供たちに対応できることである。児童の成長のモデルである中学生が目の前にあるので、小学校籍の教員にも子供たちがどうなっていくのかの見通しが立つ。例えば、7年生で家庭環境が変わることによる子供の变化も、3年生の時どういう子供だったかを知っているので、その後の小学生の指導に活かせる。	(中)教員
	子供たちが乗り越えていくことができる段差を経験していないのが不安である。	(小)教員
	小学生は家庭的な保護者のような役割を養護教諭に求めている。保健室への来室もかなり頻繁で、重症なものは少ない。保健室は安心を与える役割をする。中学生になると大きい怪我の来室が多い。精神的に不安的になりやすい時期でもあるので、今辛いということで来室することもある。	(中)教員
	保健室における 期の児童・生徒への対応では、7年生以上は自立をメインに考えている。5、6年生はそこまで求められない。受け止めたうえで、これは自分でできるよねと中学生的な部分を重ねるようにしている。	(中)教員
	期の生活指導で意識では、6年生以下の児童であっても中学校籍の生活指導主任が指導に入ることができている。	(中)教員
	学力というよりは生徒指導や児童理解の面で進歩したと思う。	(小)教員
	ペンケースやシャープペンなど、小学校は小学校の文化の中で決まっている。期のきまりは難しいので戸惑っている。期だから統一しなければいけないというのはナンセンスである。小学生にシャープペンがだめというのは、だめなりの理由がある。理由があるなら 期で統一する必要はない。小学部は小学部、中学部は中学部でついているところである。	(中)教員
	中学校籍の養護教諭は指導的な面が多い。小学校籍の養護教諭はまず手当てだが、中学校籍の養護教諭は手当をしながらも指導している。すごいと思う。	(小)教員
	職員室の座席は5・6・7年担当の教員が近いので、7年担当の立場から5・6年担当教員にどういふことが必要かは伝えることができる。	(中)教員
	生活指導の体制づくりについて避難訓練の改善がある。小学生がゆっくり避難しているのを見て驚いた。中学校の指導では校舎を出たら走って校庭へ避難させている。そのギャップは大きい。子供たちには、本当に避難する時のことを考えると、ゆっくりしていいのかと話している。5、6年生は校庭へ出る時に早く出るようになった。3年目になって変わってきた。	(中)教員
	生活指導面における課題については、若い教員が自由にやっていると変わっていくのではないかと。ベテランの教員では対応できないことがある。今までやってきたことが生かされないことがある。	(中)教員
この学校には生徒手帳がない。9年間の学校生活のきまりを入れると大きくなってしまふからである。学校生活のきまりは教室掲示にして、生徒手帳はカード型のものにした。	(中)教員	
異動当時は、どうやってやるのか興味もあり、不安もあった。5年生から西校舎なので、5・6年生のポジションが難しい。どう手を入れていいのかと悩むところ。学籍や健康診断の対応は小学校籍の養護教諭、日常の対応は中学校籍の養護教諭である。小学校籍の養護教諭ともどうすればいいかと話している。文部科学省の調査などは	(中)教員	

検証項目	内容	対象者
9年間を見通した生活指導	小学校で対応するし、図画工作などで怪我をした時には東校舎の保健室で対応することが多いので、自分が知らない間に5・6年生が怪我をしていることもある。どっちがどうやるというのは曖昧な面はある。	
	これからは異動してきた教員への説明が必要だと思う。落し物や忘れ物をした時にどうするのか、標準服のルールはどうするか、それぞれの学校の指導の考えがある。教員ごとに言っていることが違うといけな部分については、年度当初の説明によって少なくなるのが一般の中学校である。本校ではそれができていない。文書にして足並みをそろえて共通理解する機会が必要である。	(中)教員
	連携して互いのよさを学ぶというところはある。ただし、例えば標準服というものへの感覚は違う。小学校では服装について指導してきた経験がない。足並みを揃えなければいけないのだろうが、小学校だから何着てもいいじゃないかと保護者に言われると、学校で決めているのと言える教員もいるが、そうだなと思ってしまう教員もいる。最初のうちは、始業式などの儀式的行事ではこうしてきてくださいと保護者にメールを出していたが、最近では言わなくても標準服に準じた服装で登校するようになった。2～3人くらいは赤いシャツとかで登校したりする児童もいる。	(小)教員
	小中一貫教育校の在り方について、教務的には比較的早く理解できた。生活指導的にはいつまでも慣れなかった。小中一貫教育校としての学校のきまりができていなかった。生活指導をどうすればいいのか、1年間分からなかった。	(中)教員
	小中一貫教育校の生活指導について、小学校の文化、中学校の文化、いいところは交わればいいが、変わらなくていいところもある。発達段階に合わせた指導について時間をかけて理解していく必要がある。	(中)教員
	8・9年生でも小学生を見ている。8・9年生に次のステップを見せていくことができれば、社会の期待には応えられない。	(中)教員
	小中一貫教育校の開校前後における子供の育ちについては、中学校3年生(9年生)が一番上という意識は変わらなかった。もともと大泉学園の子供たちは優しい子供が多い。中学校から入っても優しく迎えてくれる。1～9年で行動することが多いので、何かを計画する時に1年生にはこれは分からないのではないかなどと7～9年生が想像することができるようになり、視野が広がった。	(小)教員
	大泉学園中学校、大泉学園緑小学校と3校で話をした時、大泉学園中学校の教員が「掃除の仕方をしっかり教えて欲しい。雑巾は投げるものじゃないし、箒はチャンバラするものではない」と発言された。その時、本校の中学校籍の教員が「私たちもそう思っていた。でも小学校の時はとても丁寧に掃除をやっている。けれども中学校になるとそうになってしまう。そこをどうするかを考えなければならない」と言ってくれた。	(小)教員

小学校から中学校への円滑な移行による安定した学校生活

5～9年生が同一校舎で生活	5年生は4年生の時と比べて意識が違う。5年生には西校舎に行ったのだからしっかりやるという意識が芽生えている。宿題をやってくるようになり、持ち物をきちんと持ってくるようになった。	(小)教員
	7年生は5・6年生がいることで先輩としての振る舞いがある。情操教育という面では異学年交流の効果は大きい。下の学年に引っ張られるのも悪いことではない。上の学年に引っ張られて大人びる弊害の方が大きい。後輩がいて、5・6年生が見ているのでちょっと背伸びしている。いい方向で捉えている。	(中)教員
	5年生の標準服の着用率も、特に女子で高まっている。	(小)教員
	7年生と今までの中学校の1年生を比べて、中学生になったのだからということを経験側が意識して言い聞かせていることもあり、しっかりしている。小中一貫教育校は節目がないと言われるが、そんなに感じない。	(中)教員
	8・9年生との関係について、一般の中学校では中学3年生は大先輩である。体格がすごく大きい。本校は他の中学校よりは段差が小さい。無駄に大きな隔たりはない。単に仲がいいだけかもしれない。	(中)教員

検証項目	内容	対象者
	開校時は6年の担任だった。5年生からの持ち上がりだった。戸惑ったまま一年間が終わってしまった。申し訳なかった。自分も説明しきれなかった。子供たちの感想としては否定的なものもなかったと思う。20分休みがなくなってしまったことくらいである。発散する場がなくて、はじけきれない感じだった。もう西校舎のメンバーだから大人の行動をと子供たちには話していた。	(小)教員
	5・6年生は曖昧な区分についてはケースバイケースで選べる方がいいのかもしれない。	(中)教員
5・6年生の一部教科担任制	50分授業や一部教科担任制を体験することは、スムーズに7年生になっていける流れをつくることになる。小学校の教員が同じ授業を2度、3度やって改善できるという機会はめったにない。教員も教材研究できるし授業改善できる。教員側の変化も大きいと思う。教科担任制でもっと面白いことができそうだった。	(小)教員
	教科担任制で専門性がある教員が授業に携われれば子供たちの学力も飛躍的に伸びるのでいいことだと思う。授業をやると隣の学級の様子も分かるので児童理解が進む。	(小)教員
	一部教科担任制については、教員の児童理解が深まる。中学校スタイルと言われるだけでくすぐられるものがあるようだ。	(小)教員
	一部教科担任制については、中学校に進学して子供たちが教科担任制に抵抗があると感じたことはない。職員室で小学校籍の教員の話や、社会と理科を担当で分担しているので社会、理科それぞれに力を注いでいる感じである。面白い。	(中)教員
	子供は教科担任制に慣れる。教員も教材研究や授業改善に取り組むことができる。	(中)教員
5・6年生の50分授業	5・6年生の50分の授業は教員にとってはいい。45分だと授業内でやり足りなかったことや体育の振返りの時間などが授業時間に入れられる。ただ、4年生の授業を5・6年生のペースでやると時間が足りなくなる。	(小)教員
	児童にとっては、延長した5分間が長いみたいだ。	(小)教員
	期の50分授業では、演習問題の時間が取れるので児童にも教員にも効果的である。教員にとって50分授業は全然違う。子供も慣れてしまえば問題ない。	(小)教員
	「虹を渡ろう」を始めてから、5年生は50分授業が当たり前だと思うようになり、教員より順応が早い。逆に、転入した教員は、休み時間が今までと微妙に違うのできつそうである。	(小)教員
	給食が30分に減って最初は5年生には負担であった。	(小)教員
	50分授業はゆとりがあって、最後まで演習問題ができる感じである。また、次の授業までの休み時間が10分あり、授業に余裕があることがよいと思う。初年度は定着するまで時間がかかったが、2年目からは前の時間の授業が次の時間にずれこむことはなくなった。	(小)教員
	子供たちは50分授業に慣れていて、5・6年生の担任として50分授業自体は慣れるが、放課後が大変だった。20分休みがなくなり、掃除が放課後になるので一日のリズムが違う。理科が2時間続きで実験をやるため、2時間続きの社会は大変そうだった。昨年度は理科を1時間に変えた。	(小)教員
	50分授業の効果については、個人差の方が大きく、何とも言えない。	(中)教員
小中教員の協力体制	特別支援教育については、養護教諭が中心になって、早いうちに対応したり家庭に意識をもってもらったりすることができている。	(中)教員
	特別支援教育コーディネーターの分担については、基本は校舎別である。中学生だけではなく5～9年と幅は広がった。5・6年生の特徴はまだつかみきれない。5・6年生でもっと手を入れると7年生になってからはスムーズなのではないかと思う。低学年から子供たちがよく見えるのと、前にさかのぼって話を聞けたり資料があったりするので子供を捉えやすい。	(中)教員
	7年生の生徒が生活指導上の問題を起こしたが、5年生の時にも同じことがあり、それを情報提供した。5年生の時のことを知っているのと知らないのでは違う。同じパタ	(中)教員

検証項目	内容	対象者
小中教員の協力体制	ーンを繰り返さないようにするための指導ができる。	
	5・6年生は西校舎で生活しているが、一息つきたい時に、わざと東校舎(旧小学校舎)の保健室までくる子供がいる。	(小)教員
	5、6年生から西校舎になるので、中学校籍の教員からも顔が見える。何かあれば話しかける。職員室が同じなので1～4年生についても把握できる。	(中)教員
	5・6年生で中学生に近い問題行動があった時、中学校籍の生活指導主任が担任や管理職と一緒に指導に加わることができる。	(中)教員
	生活指導面における成果は、何かあった時に情報共有しやすいことである。ちょっとでも情報があるだけで違う。職員室が一つであることの意味は大きい。	(中)教員
	特別支援教育など配慮しなければいけない子供については、7～9年生で顕著になるが、1～6年生の時にそのシグナルが隠れている。小中一貫教育校の場合、早いうちに気付いて専門機関につなぐことができると思う。	(中)教員
	月に1回、学校生活支援員と養護教諭が参加する特別支援委員会と担当教員だけで行う教育相談委員会を開いている。	(小)教員
	指導が必要な子供について教員同士で情報を共有している。校舎が分かれているので、写真を見ながら子供の情報を共有している。全校で気になる子供のことを共有してかかわっている。	(中)教員
	1～6年生が何か問題行動を起こしてしまった時に、中学校籍の教員も入って指導する。中学校籍の教員が入って、子供たちに中学生になると今こうしていることが怖いことになると伝えることで、1～6年生の児童に伝わる。保護者にも中学校籍の教員が言うと言説力がある。	(中)教員
	分掌としての生活指導主任は、現在は中学校籍の教員である。小学校籍の生活指導主任は様子を見て合わせてくれているのでうまくいっている。たまたまかもしれない。	(中)教員
	保健関係の仕事については、小中どちらかが原案を作って協議する。健康診断は5～9年は一斉に行っている。学校医は1～6年生と7～9年生で分かれている。できれば一人がいい。耳鼻科の学校医は一緒である。	(小)教員
	昨年度、スクールカウンセラーが2名に増えた。相談をどこで区切るかということで、一応、1～4年、5～9年で区切っている。5・6年生は今までのつながりもあり、どちらでもいいということで曖昧にしている。カウンセラーは男性と女性である。同性がいい場合など相性もある。情報交換を月に1回、学校生活支援員も入れて行き、情報を出し合っている。	(中)教員
	小学校から中学校へ上がった時のケアが違うと思った。両方で分かっているから対処しやすい。みんなが知っているので声をかけられる。	職員
	保健担当として校外学習などで担当を交替することはあまりない。運動会は西校舎の保健室で対応したが、物の置いてある場所が分からないので東校舎に連れて行くこともあった。	(中)教員
	小学生が保健室に求めるニーズと、中学生が保健室に求めるニーズはかなり違う。やはり保健室は二つあり、別々の方がやりやすい。視察にいらした他市の小中一貫教育校の教員から保健室が一つと聞いて、大変だと思った。	(中)教員
	月1回の会合以外に連携で配慮していることとして、スクールカウンセラーの先生につなげてもらっている。	(中)教員
開校時は6年の担任だった。5年生からの持ち上がりだった。戸惑ったまま一年間が終わってしまった。申し訳なかった。自分も説明しきれなかった。子供たちの感想としては否定的なものもなかったと思う。20分休みがなくなってしまうことくらいである。発散する場がなくて、はじけきれない感じだった。もう西校舎のメンバーだから大人の行動をと子供たちには話していた。	(小)教員	
6年生が7・8年生となった姿を見て、心配していた子供が活躍している姿をみると嬉しい。心配していた子供が心配な行動をとっていると声がかけられる。昔のことを知っている教員が声をかけると安心するのではないかと思う。遅刻が常習の子供が校門から	(小)教員	

検証項目	内容	対象者
小中教員の協力体制	入って歩いているのを職員室から見ていると、あわてて走ったりしていた。	
	一般の小学校卒業生との違いとして、大泉桜学園の7年生はやや幼い、小学7年生という感じがあった。中学生になったという感じがあまりない。久しぶりに見る感じがなかったためかもしれない。いい意味では優しさが残っている。	(小)教員
	特別活動の面で何かうまくいかない、何だろうと分からないまま過ぎてしまった。ねらいとするものが5・6年生と7～9年生では違うのかもしれない。4年生でいきなり委員会のリーダーとなる。5・6年生が委員会活動をしていたころは5年生がサブで6年生がリーダーになる。リーダーとサブという関係がないので敬うということがなく、関係が親しくなり過ぎる感じもあった。言うべきことを言う力が付かないのかもしれないという気がした。	(小)教員
	小中一貫教育校について、開校時のすり合わせの時代に立ち戻る必要はなく、これからは、今いる子供たちをどうしていくのかという視点で、教員同士で話ができればいいのではないかと思う。	(中)教員
	7年生の学級編成において、通常の学校と同様に支援が必要な生徒への配慮については、小学校の時の担任に聞取りを行うが、小中一貫教育校では、それに加えて職員室の話題の中で子供たちの普段の様子が分かる。7年生の学級編成については途中で6年生の担任に見てもらうなど関与してもらったので、不安な要素を減らして学級編成ができた。	(中)教員
	7年生の学級編成について、6年生の担任の意見を中心に編成したが、中学校の考え方と異なる面があった。翌年からは、中学校籍の教員が中心となって学級編成をした。直接、小学校籍の教員に聞けるし、普段から児童の様子は分かっている。	(中)教員
7年生が実際にスタートして、もうちょっと何とかしなければならないことがあったのではないかと感じた。小学校と中学校では学級編成の考え方が違う。中学校ではどの学級でも同じような授業ができるようにと考えるが、小学校にはそういう発想はない。	(中)教員	
学校生活への満足度と不登校数	他の小学校から7年生で入学してくる子供へは配慮が必要である。今は学校が落ち着いていて穏やかな子供が多いので、居心地は悪くないと思う。教員が努力している。	(中)教員
	不登校や問題行動については、早期発見、早期対応について頑張っているが、うまくいかず、発見や対応が上の学年にきている。	(中)教員
	中学校の不登校の中には、小学校の時に解決できていないまま入学してくる場合がある。ちょっとした一言で学校に来られなくなることもある。	(中)教員
	通常の中学校にいた時は、養護教諭として生徒の小学校時代を知りたいと思っていた。小学校の養護教諭に電話することはあったが、小学校の担任と話すことはなかった。情報が伝わるのに時間がかかっていた。	(中)教員

幅広い異年齢集団による豊かな人間性・社会性の育成

合同学校行事	小学校では教員全員で運動会をつくり上げていくが、中学校では体育科の教員が主に担当する。小学校ではどの学校もだいたい同じ形の運動会になるが、中学校では教員が変わるとやり方が変わってしまう。中学校籍の教員が大泉桜学園の今までの運動会のやり方は違うと言い出すと、そこで膨大なエネルギーが必要になる。	(小)教員
	桜祭や運動会では、子供たちにとっては、いかに自分の力を発揮するかが大事である。上級生にとっては、例えば1年生のトイレのお世話をしたり、自分が運動会や桜祭での運営に役立っていたりするという感覚をもつことができる。下級生にとっては、これから自分がどうなっていくかのイメージをもちやすい。難しいと思うのは中学校は学年のまとまりで仕事をする人が多いので、全体のことや他の学年のことがよく分からない。	(中)教員
	入学式や卒業式については、もともとの良さがいい形で融合している。例年通りということが増えてきた。同時にもう一度考え直してもいいかとも思う。	(中)教員
	今までの小学校での入学式では、2年生の出し物があり、近い年齢なのでそれで雰	(小)教員

検証項目	内容	対象者
合同学校行事	<p>困気が和むという感じがあった。大泉桜学園の入学式はそういった意味では他と違うが、他の入学式とは比べようがないため、1年生には分からないと思う。ただ、2年生にとっては出し物がないので、それに向けて準備する機会もなく、残念なことかとも思う。</p>	
	<p>保護者はより高い学年の先輩がいることを意識していて、上の学年とかかわるようにして欲しいという意見が出る。小中一貫教育校に反対する保護者の声はずっとあったが、今年の運動会では上の学年の子供が下の学年の子供を手助けするなどの様子について、お褒めの言葉を多くいただいた。</p>	(小)教員
	<p>開校当時は小学校籍と中学校籍の教員の気持ちの違いに戸惑った。これまで経験してきた小学校では特別活動に力を入れてきたところばかりだったが、中学校の教育課程では時間割変更が困難なことを小中一貫教育校になって初めて感じた。小学校は学級担任だから時間割の変更が簡単にできるが、中学校には週3日の講師とかもたくさんいるので。</p>	(小)教員
	<p>行事に対する思いの違いも大きかった。9年生の教員から「今年の9年生は9年生を送る会はいらない」という意見が出たことがあった。6年生を送る会は6年生のためだけのものではなくて、5年生にもおもてなしの心を伝えたり、学級のまとまりを強めたりする機会になるのだが、学校全体の行事として捉えられてないのかとも思った。</p>	(小)教員
	<p>桜祭での9年生の歌は圧巻であり、子供たちも引き込まれている。ホールを借りているので舞台に立った高揚感が全然違う。大変なのはそこに至るまでの教員の葛藤である。学芸会はなくなったが、学芸会をやりたいという気持ちが保護者にも教員にもある。小学校は舞台で失敗しないように時間をかけて練習するが、中学校は放課後の練習がメインで時間をかけられない。</p>	(小)教員
	<p>運動会や桜祭については、全学年が一緒にやるのが決まっていた。もし別々にやるか一緒にやるかを選べたら、どちらがいいかは難しい。</p>	(小)教員
	<p>行事では、本番で失敗しないようにかなりの練習をし、それでいて「自分たちでがんばった」と子供たちに思わせることで達成感をもたせようとしている。でも、8・9年生の教員が指揮すると、リハーサルが少なく本番でうまくいかなかったりする。教員が今日はこれをさせようという方針をもたずに進めるので時間がかかる。小学校では最初に今日一日ではこういう練習をする方針を決めていて、できるだけ下校時間を早くしようと努力をするが、下校時間が6時半とかに延びてしまったりしていた。でも、特別活動に力を入れていた中学校籍の教員が開校してから2～3年目に着任して、「それは違う」と言ってくれて背中を押してくれた。</p>	(小)教員
	<p>行事を通した子供たちの成長の変化について、中学校入学は子供たちにとって大きな変化になるはずで、よい部分は大きい。</p>	(小)教員
	<p>行事の考え方が違うことを行事ごとに感じた。小学校籍の教員は細かく計画を立てて十分に打合せをする。中学校籍の教員は大雑把で文書を読んでも聞かないと分からない面があった。避難訓練の文書の作り方なども変わってきた。</p>	(小)教員
	<p>開校した4月1日から、経験したことのない慌ただしさだった。スタートは9年の副担任、7月から担任となり子供との関わりが増えた。子供も小中一貫教育校に対する戸惑いがあった。特に最初の9年生。子供は案外、保守的なので、今までやってきた運動会を念頭に、こういう運動会をやるのではというのがあったと思う。子供にとってどうなのかと思った。</p>	(中)教員
<p>行事の検討は、互いの文化がある中でどうすり合わせるかであった。校長に相談して、じゃあ私が行ってくと校長が相談してくることもあった。校長同士で相談して決まった後で動いた。運動会は学級対抗ができないことへの不満があった。目的自体が小学校と中学校で違う。小学校では学芸会がなくなった。今までの流れや教育観の違い、授業時数の考え方も小学校と中学校で違う。中学校では前もって授業カットを決めないといけない。急には対応ができない。行事に向けた練習も、小学校は足りなければもっと練習をと言うが、中学校は言われてもできない。試験の後に授業を実施すること、避難訓練で授業をカットすることなど近隣の中学校との違いもある。</p>	(中)教員	
<p>中学校が考える特別活動とは、ゴールは一緒だけど入口が違うだけだったと結果とし</p>	(小)教員	

検証項目	内容	対象者
合同学校行事	て思う。小学校は行事で育てていく。中学校は高校受験がゴールで授業時数の問題もある。小学校は児童の全体を育てあげていくが、中学校はトップの生徒を育てて引き上げる感じである。生徒会のスケジュールが分からなかった。1年生を迎える会が必要か、何年生が中心になるかなども分からなかった。対面式や部活動紹介、部活動の仮入部期間などを考えなければならない。	
	小学校と中学校では、学級担任制と教科担任制に派生する考え方の違いが大きい。運動会では、中学校籍の教員は学級の生徒たちとつながりたいと思うが、小学校籍の教員は学級にとらわれずに紅白に分ける。音楽会でも、中学校ではコンクールにしたいと思っている。中学校は学級を分解する発想がなく、職員会議でも学級対抗に戻したいという雰囲気は大きい。学校全体の一体感としては、1～9年生全体でやったほうが良いと思う。ここ数年はこのやり方が定着するようになった。	(小)教員
異学年交流・たてわり活動	昨年度は5年生を担当していて、5～7年生で飯盒炊さんの縦割り班を組んだ。本当は5～7年生の取組をたくさん行いたかった。保護者から5年生は 期では何で縦割りが少ないのかという意見も出ていた。インフルエンザの流行で昨年度は防災リーダーの活動が十分にできなかったが、準備は一緒にできた。7年生でリーダーを経験できる機会を多く用意できたのはいいことだった。	(小)教員
	期のリーダーとして7年生は何をしていたかということで、最初は飯盒炊さんのリーダーにした。それだけでは意味がないので防災リーダーにした。	(中)教員
	交流給食では、下の学年の子供は質問を考えてきて、上の学年の子供に聞く。廊下ですれ違う程度では話せないような会話ができる。	職員
	交流給食は東西の校舎にいる児童・生徒が顔見知りになり声をかけるようになるきっかけになっており、そのことが学校行事などにつながっている。小学校の児童が中学校の生徒と会うことで中学校のことが分かるようになり中学校が身近になる。	職員
	交流給食はどの学年の子供も年2回くらいある。低学年の児童はふれあい給食もある。これは地域の方を招いて給食を一緒に食べる取組である。	職員
	交流給食は微笑ましい。子供たちは中学生が来るとうれしそうで、誰かのお兄さんやお姉さんが必ず紹介される。中学生も小学生に喜ばれてうれしそうである。	職員
	ふれあい給食は常連の方が楽しみにしている。ランチルームがあってよかった。	職員
5・6年生からの部活動	体育は5・6年生が体育館も校庭も東校舎側を使うので、怪我の対応も東校舎で行う。6年生になると大人っぽくなるのは、部活動が影響しているのではないかと思う。	(小)教員
	5・6年生の部活動での怪我が多い。中学生向けの練習をしてしまう教員側の意識もある。	(中)教員
5～9年生による児童生徒会活動	5～7年生を引き上げるために、行事となると授業時数の問題がある。細かいところでも活躍できる機会があるといい。児童生徒会の役員選挙では、落ちるのは怖いけど、4年生では全員で頑張ろうという指導だったので、その勢いでたくさん立候補すると活性化する。なかなか立候補が出なくて、各学級で教員から声をかけてもらった。	(小)教員
	児童生徒会役員会で、(8・9年生の)リーダーが引っ張っていた。(5・6年生には)いざれそうになりたいという憧れがある。部活動と両立したいので、時間の切り方やローテーションを子供たち自身で工夫していた。異学年の集団として成長していた。	(小)教員
	児童生徒会担当の教員の意識として、児童・生徒に求めることは同じである。小学校としてはどうか、中学校としてはどうか、これで動けるかと確認しながら進めた。7～9年生の力は大きい。先輩の意見で動く良さもある。	(小)教員
	児童生徒会、両校舎の委員会活動、飯ごう炊さんなどで7～9年生に関わった。子供たちは柔軟で子供たちと一緒に考えることができた。	(小)教員

小中学校教員の相互協力による学力・体力の向上等の高い教育効果

小中合同の校内研究	小学校籍の教員と連携して課題に取り組むことについて、システムとして5・6年生と7年生で教員の担当が変わる。 期については、小中で乗り入れ授業などの方策が必要かもしれない。	(中)教員
-----------	---	-------

検証項目	内容	対象者
小中合同の 校内研究	4～6年生で算数をみていると、まったく分からない子供をつくってはいけないと思う。7～9年生が見えるので、その後に数学がまったく分からないという状況が見えてしまう。そのため、早いうちから放課後に集めて指導している。	(小)教員
	出前授業は中学校籍の教員に負担をかけるのでやっていない。	(小)教員
	算数の教科書の問題が難しかったので、それに入る前にもう少しやさしい問題をワークション入れてみた。数字を少し変えるだけでもやさしさが変わる。児童はすごく変わったように思う。算数の担当教員と数学の担当教員が月1回、話合いの機会をもっている。	(小)教員
	算数から数学へと変わる時のフォローの仕方として、7年生になった時に毎回繰り返して振返りの問題や課題を出すことで、生徒に定着するように工夫している。宿題は5分や10分でもできるようなものを出している。正解しなくてもいいから、考えてやってみるプロセスが大切だと伝えている。	(中)教員
	習熟度別指導については、3・4年生から少人数指導担当の教員が入って実施している。グループ編成は小中学校それぞれでやっている。小学校は少人数担当教員が中心である。	(中)教員
	小中一貫教育で指導できることの成果については、今までは中学校籍の教員は「何でここでやってこなかったのか。もっとやってほしかった。」と思うことがあったけれど、今はそれを小学校籍の教員に「ここは中学校でしっかりやるから、ここを重点的にやって欲しい」ということをざっくばらんに伝えられる。課題は、どうやってつなげるかということがある。中学校籍の教員は「教科書に赤が入っていないね」と生徒に言われる。中学校にはそういうタイプの指導書はない。若い教員への指導が課題である。若い教員は教科書どおりに指導して、逆に子供たちに伝わらないということがある。その代りに小中一貫教育だと若い教員には子供の学習のつながりが見えやすい。小中一貫教育だと子供の育ちのプロセスが見えやすい。	(中)教員
	理科の学力向上への効果はすぐには出ないが、小学校の教員にとってメリットがあると思う。	(中)教員
	小学校籍の教員から学んだものは、きめ細かさや教材準備、掲示物もきれいであることである。小学校の学習内容との重複も授業で意識するようになった。	(中)教員
	カリキュラムの面では、資料を活用する力が足りないということで研究した。自分自身も勉強になった。教材についても小学校籍の教員と中学校籍の教員が聞き合えることが重要である。資料集の貸し借りや憲法の学習も小学校でかなり勉強してきていることが分かった。	(中)教員
	評価をどうするか。中学校では進路に直結するし、保護者への説明責任も大きい。評価規準については、中学校では4月の保護者会で説明する。	(中)教員
	道徳教育について9年間を見通したカリキュラムを立てたが、その効果を実感しないまま異動した。命の教育に全員で取り組んだのは良かった。	教員(小)
	小中一貫教育校だからできる指導として、小学校でやっている保健指導を中学校でもやりたいと言っていた。	(小)教員
	体格は良くなっても状況判断は備わっていないということがある。体力的にも投げる力は全学年で低い。ボールを取る時もうまく下がれないということを保健体育科の教員と話していた。	(中)教員
小中一貫教育校としてこういう9年生を育てたい。ではそのためにどうするかと考えられたことは大きい。小中一貫教育は現在勤務する学校でも始めたが、まだその視点もっていない。9年生の進路が決まると、小学校籍の教員もおめでとくと手を叩いて祝ったり、普段から声をかけたりと小中一貫教育校の良さを感じる。小さい子供がいるから生徒も、お手本にならなければならないという意識はあった。交流給食でも自然に話しかけたりしていた。	(中)教員	
小学校籍と中学校籍の教員が連携することについて、9年間を通して考えられることが大事なので、小学校6年間というゴールと中学校3年間のゴールではなく、1本のゴ	(中)教員	

検証項目	内容	対象者
小中合同の 校内研究	ールになったので考えやすくなった。	
	本校の中学校籍の教員は協力的である。小中連携もやったことがあるが、その時は大変だった。その時の中学校の教員は「なんでやらなければいけないの」で終始した。授業も見せたくないという感じだった。	(小)教員
	教員として得たものとして、小学校籍の教員の日常の様子を見ることができた。勉強になった。それぞれがそれぞれの場面で必要な指導を行ってきた。	(中)教員
	小学校が中学校の、中学校が小学校のというように互いの授業を見合うところからスタートした。ここ最近、中学校籍の教員と小学校籍の教員同士で話ができるようになり、ようやく教科ごとの研究グループができた。	(小)教員
	校内研究での意見交換は、特に若い教員にとって研修的な意義が高い。今後、異動してからも生きると思う。	(中)教員
	指導計画さえここで作っておけば、異動で前からいた教員がいなくなっても、そんなに悪くはないだろう。それが自分の異動までの最後の宿題だと思っている。	(小)教員
	特色ある教育活動をしているが、新しい教員が転入してきて当初のねらいとずれてくるのが懸念される。今の教育を完成させることが大事だと思う。そうすると、新しい教員にもよさが分かる。	(小)教員
	中学校のあり方を見直すきっかけになったこととして、定期考査の後に全員を残して勉強させるのと、自分で計画させて勉強するのとどちらがいいのかということである。	(中)教員

施設整備における効果と課題

1つの職員 室	生活指導面における成果は、何かあった時に情報共有しやすいことである。ちょっとでも情報があるだけで違う。職員室が一つであることの意味は大きい。	(中)教員
	開校前の準備では、何時間話しても何も決まらない会議があった。開校前には「もっとフレキシブルになればいいのに」と思っていた。職員室が一緒になって中学校の様子が初めて分かり、簡単には決められない事情がよく理解できた。	(小)教員
	一体化した分掌業務として転出入の様式を統一した。小学校の教務の方が進んでいてよかった。職員室が同じなので意思疎通が進んでうまくいった。職員室が分かっていたらうまくはいかなかった。扉一枚でもしきりがあると敷居は高い。	(中)教員
	職員室で6年生担当教員の隣の席は7年生担当の教員だったので、中学校籍の教員の動きを学べるいいチャンスだった。開校前は、なんでこんな大きな声で指導するのだろうかと思っていたが、中学生たちは声変わりもあって大きな声を出さないと教員の声が通らないとか、毅然とした態度で臨む姿勢を示す必要があることとか、様々な意図があったことが分かってくる。互いに配慮して仕事ができきたと思う。	(小)教員
	(再掲)5・6年生の顔が見える。何かあれば話しかける。1～4年生は東校舎なのであまり接しない。5・6年生担当の教員は、1～4年生から5年生への接続に課題を感じているかもしれないが、教員は職員室が同じなので1～4年生についても把握しているようにみえる。1～4年生と5年生との接続については、5・6年生の教員に聞かないと分からない。職員室が一つというのは最大のメリットである。すごく大きい。自分のキャリアにとってもすごくプラスである。これがなければ意味がない。	(中)教員
校舎の区分 け	中1ギャップへの対応として、本校では5・6年生をパワーアップさせている。	(小)教員
	(再掲)5年生は4年生の時と比べて意識が違う。5年生には西校舎に行ったのだからしっかりやるという意識が芽生えている。宿題をやってくるようになり、持ち物をきちんと持ってくるようになった。	(小)教員
	(再掲)7年生は5・6年生がいることで先輩としての振る舞いがある。情操教育という面では異学年交流の効果は大きい。下の学年に引っ張られるのも悪いことではない。上の学年に引っ張られて大人びる弊害の方が大きい。後輩がいて、5・6年生が見ているのでちょっと背伸びしている。いい方向で捉えている。	(中)教員
施設整備	小学校と中学校では規格が違うものがあり、階段の高さや跳び箱の高さも違っている。この学校は二つの学校がつながっているの、施設面ではゆとりがある。また、教	(小)教員

検証項目	内容	対象者
	員たちは小中学校で仲がいいので、道具や場所などの融通が利き、互いに貸し合ったりできる。	
	小中一貫教育校としてきれいにしたいという思いがあった。家庭科室を一つにして5～9年が使っているが、課題ではないか。第2理科室は来年の夏に増設する予定だが、5・6年生に対応するのだろうか。	職員
	規模は小さくても7～9年生には理科室が二つあるべきだ。小中一貫教育校として三つ目の理科室が整備される予定だが、7～9年生では二つ使う。5・6年生が理科室を使う予定はない。	(中)教員
	二人体制で二つの保健室は理想的である。対応しやすい。二人で相談できるし、協力できる。	(小)教員
給食調理の体制	5年生の給食の時間が短くなることについて、5年生には短くなったという意識がないので、準備に時間がかかって食べる時間が少なくなってしまう。もう少し長いといいと思う。せめて5・6年生だけでももう少し給食の時間が長いといいと思う。教室移動があるとさらに短くなってしまふ。各階に給食配膳室があり給食を取りに行くのだが、西校舎からは遠い。遅い時は5年生に届けに行くこともある。	職員
	給食の時は全学級を栄養士2名で回り、声をかけたりする。全員とはいかなくても、食の細かい子供などには目が向く。	職員
	朝のミーティングは給食調理員全員の10名で行う。味見は2名の栄養士で行う。	職員
	小学校と中学校を一緒にして給食を出す上での工夫や取組について、1年生から9年生までの中で大きなくりがある。小学生は1・2年生、3・4年生、5・6年生で分かれており、量の調整もしている。中学生は小学生よりも一品多くしたいところであるが、教員への配食も関係するので品数は増やさずに量で調整している。品数を増やせば小学校籍の教員と中学校籍の教員で食べるものが変わってしまうことになるので、教員は中学生の量で提供している。	職員
	小学校と中学校で別々の時は献立を別々に考えることができたので、一品多くしたり、小学生がいない時には中学校だけで考えることができた。小中一貫教育校になった時に食器の大きさを変えた。1年生から4年生までのものとそれ以上の学年用で大きさを揃えた。また食器の数も9種類に増やした。これは区内で一番多いのではないか。	職員
	味付けや献立の配慮について、家庭では子供向けという配慮はない。献立を特に子供向けということで意識することはないが、例えば木の芽和えというようなメニューの場合は、1年生から4年生がいない時に出すといった配慮はしている。	職員
	1年生と9年生ではパンの大きさや給食の量が全く違う。交流給食では、普段は残してしまう子供も下の子供がいるとがんばって食べている姿がある。	職員
	栄養指導の面で配慮していることとして、小学校だけだった時は6年生までで終わりであった。小中一貫教育校になり子供の育ちが繋がって9年間をみられるようになった。	職員
	食中毒や1年生から9年生までの子供がいることで、特に温度管理に配慮している。本校は調理室に冷房があり冷却器もあるので冷やすこともできる。校舎で給食時間が異なるので、時間差で作ったりする。給食の内容によっては小学生にだけ早く提供することがある。	職員
	ゼリーなどは上の学年のものは冷蔵庫に入れてしまっておく。ギリギリまで冷やして出したい。設備的にできない学校も多い。	職員
	親子給食の方式と小中一貫教育校との違いについて、二つの釜があるので、低学年と高学年で分けている。和食は低学年の方に抵抗がある。小中一貫教育校になる前は小学校をメインに考えていた。小中一貫教育校になるとゴールは中学生である。栄養価の基準は中学生の方が脂質が多いので、量だけを変えても適正な栄養価比率とならない。同じ学校なので献立は同じと考えると、量だけで調節することが難しい。給食費は小学校の3段階と中学校で4段階になっている。中学校籍の教員からは品	職員

検証項目	内容	対象者
給食調理の体制	数を増やして欲しいとの要望はあるが、品数を増やすと一人当たりの量が少なくなり、低学年の子供たちは給食を適量で配ることが難しくなって大変である。学年によって食材を切る大きさを変えるなどの配慮をしている。ポウルに入っているものを分けて配るのは、低学年の子供にとっては難しいので、配りやすいものを考えている。	
	給食の出し方にしても、例えば冷やしうどんであれば、麺、野菜、つゆとなるが、低学年だと麺と野菜を一緒に出している。5・6年生は給食の時間が短いうえ、専科の授業で東校舎の端にある理科室などからの移動が長く大変である。	職員
	開校2年前から給食が業務委託になった。今年度は委託業者が変わった。小学校が休みの場合でも中学校の給食がある場合もある。	職員
	教職員の給食について、全教職員が中学校の給食費の金額を支払い、中学校の給食を食べている。中学生に一品多く付けたくても、小学校籍の教員が小学生と一緒に教室で食べることを考えると、品数は変えられない。小中一貫教育校では同じ品数にして量で調整することになる。段階をどうやってつくるか課題である。	職員
	本校の給食室は他校に比べて釜が多く、6釜ある。このため、カレーや麻婆豆腐など辛さや刺激があるものは、学年で味を分けて提供している。小中一貫教育校になる前から、本校は小学校の給食室で作ったものを中学校に渡すことになっていた。小中一貫教育校になっても大きく変わることはなかった。小中一貫教育校になってからは、小中学校両方の教室に行くと子供の様子を見られるようになった。	職員
	開校前の親子給食(大泉学園桜小学校が親校、大泉学園桜中学校が子校)では、小・中学校を結ぶ扉は開かずの扉だった。隣同士だったが別の学校であり、交流はなかった。今は男子更衣室になっている所である配膳室の隣から給食を運んでいた。一時期、給食室からたばこを吸っている子供が見えた時代もあった。	職員
	ランチルームはできれば西校舎にあるとよい。移動に時間がかかるので廊下を走って教員が駆けつけることになっている。	職員
	食器は1～4年と5～9年で分けている。施設改修で給食室に防火扉を入れた。給食室が200㎡以上ある場合は必要である。熱風保管庫も入れた。	職員
	給食指導については、小学校の方が丁寧である。	職員
事務職員の協力体制	開校時に着任するまでは、都では学校に限らずいろいろなところにいたので、一般の小・中学校と比べてどうかということが分からない。普通の小学校では都費の事務主事は一人だが、ここは二人なのでやりやすい。もう一人の事務主事と知っていることが違うので、話し合って仕事ができる。一人配置の場合は、事務連絡会や知っている事務主事の人に聞くしかない。	職員
	開校前から経緯を知っていればいいが、開校と同時に異動してくると何も分からない。通帳をつくるにしても調査に回答するにしても、学校名はどれを使うのか、給与の振込も小中学校が別々で、住所も小学校として出す時は旧住所で出し、小中一貫教育校は中学校の所在地で出すなどややこしい。	職員
	異動してくる時に、小中一貫教育校とはどういう学校なのか研修をして欲しい。心構えができる。	職員
	日常的な管理については難しさをあまり感じていない。最初は広すぎてどうかと思ったが、事務主事二人で相談しながらできるのでいい。	職員
	校長や副校長とのやりとりについて、最初は大変だった。副校長が3人いて、教員間での分掌はあったものの、誰に印をもらえばいいか分からなかった。今は統括する副校長にまず持っていくようにしている。	職員
	副校長の役割分担について、どの副校長の担当なのか分からない場合は、今では副校長のどなたかの机においておくと、担当の教員にまわしてもらえる。	職員
	小中一貫教育校の事務について、予算は準備段階で困った。区では予算が小学校費と中学校費が分かれている。職員室で使うものはどちらで買うのかという問題が出てきた。今は、消耗品は中学校費、芝生など小学校限定のものは小学校費で出している。	職員

検証項目	内容	対象者
事務職員の協力体制	1・2年目で大変だったことは、区で小中一貫教育校の認知度が低く、予算配当が変なところに入っていて執行できないことがあった。また、備品台帳を一つにしてもらえなかったため、何度も区にお願いした。	職員
	学校納付金について、1年生でデータを登録すれば9年生までゆうちょ銀行で引き落としされるシステムにしたが、7年生の保護者は改めて審査があるのに就学援助の申請を忘れて、未納になってしまうケースがいくつかある。	職員
	給食費については、7年生以上の保護者は経験をしていくので未納が少ないが、低学年に関しては未納が多い。	職員
	大泉桜学園には標準服の補助金もあるので、副校長に周知用の手紙を作ってもらったりした。	職員
	工事費用は小学校と中学校で分けて配当されるが、分けて執行するのは難しい。サッカーゴールを塗装するのは小学校と中学校で同時にやるが、領収書を分けると分割予算ということになり法律に抵触するので、小学校か中学校かどちらか一方の予算にその都度割り振って処理している。	職員
	小中一貫教育校を作るうえで難しいところとしては、予算がないことである。小学校と中学校では階段の1段の高さや黒板の高さも違う。自分は小学校担当なので、中学校のことは口出できなかったが、いざできると5・6年生には黒板が高い位置にありすぎて使えなかったため、結局縦がより長いものに作り変えた。西体育館も小学生の保護者が連れてくる4・5歳の子供たちが階段を上るのに危険だったため、スロープを作った。また、小さい子供だと手が挟まってしまうため、西校舎の昇降口のドアにゴムを貼った。	職員
	区は予算がないということで、校長室など新しく作る場所だけを改築した。しかし教室は汚いまま、見学に来る人もいるので、学校配当予算で塗り替えたりタイルを替えたりした。これらは小分けに工事したが、大変だった。小中一貫教育校はお金をかけないでやるのは無理だと思う。校長が2・3階の渡り廊下を何度も要求したが無理だった。	職員
	安全管理について、教員に安全点検をしてもらっているが、うまく回っているとはいえない。小学校は児童が小さいから安全点検をするのは当たり前だが、中学校は「何でやるの」という感じであった。校庭などは事務では気付かないところがある。	職員
小中一貫教育校の校務分掌組織	開校前の準備の大変さを知らない教員が増えてきた。例年通りが増えてくると、改善の余地も増える。	(中)教員
	最初の年は、職員会議の提案の前に一人一人の教員に話を調整していた。でも今は、小学校と中学校の間に線がある感じがしない。こちらの思いが分かっていただけ。特別活動を計画する際に楽しくなった。開校当時の苦しみを知っているから仲良しというものもある。	(小)教員
	11月に来た時には、開校まであと少しだということで、調整しなければならないことがたくさんあった。標準服、門の扱い、保護者対象の100ぐらいのQ & A作成、一つにした組織の作成など。教育課程を編成する時には、1～9年生までであるので、月行事の予定表が変わってしまう。名簿も小中学校9年間の様々な名簿を作るが、中学校籍の教員は家庭数という言葉が知らなかった。電話番号検索で兄弟姉妹関係が名簿で全て分かるようにした。地区班や登校班を手作業で作るのも大変で、中学生は入っていなかったためそれを足した。他の人が気付かないことを言われた時にやるのが大変だった。職員室のレイアウトも、机の間隔などを事務室で打合わせをしながら作った。	(小)教員
	管理職の中でも、小学校籍と中学校籍でどれだけのことが分かっているかの探り合いをしながら進めていった。	(小)教員
	副校長3人の仕事分担について、大雑把に学年の分担と分掌はあるが、互いに任せきっているわけではない。ただ、テレビ局の取材が来るなど、誰がどうしたらいいか分からない仕事は統括する副校長に回ってくる。一人での副校長経験がない人には、仕事を教えたり仕事を任せたりしている。	(小)教員

検証項目	内容	対象者
小中一貫教育校の校務分掌組織	学級担任制と教科担任制では考え方が違う。一番違うのは時間割についての考え方である。最初の桜祭では、小学校では音声ということで国語の時間を使って練習したりできるので、予定より小学校の子供たちが練習していて、中学校籍の教員が怒った。小学校と中学校の考え方の違いについて気を付けていないとふと出てしまう。	(小)教員
	平成23年度は聞いていたとおり、学校種の文化の違いがあって大変だった。平成24年度は少し分かり合えた。平成25年度はだいぶ分かってきた。平成26年度はとてもやりやすくなった。	(小)教員
	開校時の自分の写真をみると、とても険しい顔をして仕事をしていた。ゼロからという必死さがあったと思う。	(小)教員
	小中一貫教育校の仕事の進め方について、小中一貫教育校になって仕事が増えたということはあまりない。連絡調整は増えた。6年分の調整よりは9年分の調整の方が大変である。全員で集まりにくいとか話が伝わりにくいという面はある。東校舎と西校舎で違う時間が流れている感じはある。	(小)教員
	平成27年11月に大泉桜学園の研究成果に関する報告会があるが、その後に人事が大幅に入れ替わり、大泉桜学園を立ち上げてきたメンバーがいなくなる。今は教員が一つの方向を向いているけれど、異動してきた人が小中一貫教育であることをマイナスにとらえていると、ベクトルが一つの方向を向かなくなる危険性がある。	(小)教員
	特別活動部は大泉学園桜中学校にはなく、生活指導部の中に特別活動が含まれていた。小学校は特別活動の分掌がないとできないのでつくってもらった。それを理解してもらうのに時間がかかった。	(小)教員
	小学校籍、中学校籍の教務主任が連携することについて、自分は中学校の進路指導については経験していないし、中学校籍の人は小学校の学級担任制のことを経験していないので、連携は必要である。校庭を使う時や共通の行事、学校公開などの時間割の調整は密にする必要がある。	(小)教員
	教務主任が二人いるのは、分業など便利な部分もある。	(小)教員
	2校目の小中一貫教育校を作るという話があるが、大泉桜学園をコピーしたのではうまくいかないと思う。大泉桜学園のやり方の提示はできるが、条件に合わせた違うやり方が必要になる。	(小)教員
	5・6年生と7年生の教員の連携について、1・2年目は溶け合わない。行事を回すことで精一杯だった。ここ2年は1期で食事会も行くようになった。職員室の席も近くなり話し合えている。今の7・8年生は自分が指導した生徒なので、生徒をはさんで話ができる。子供が淋しそうにしていたら声かけられるし、7・8年生の教員に伝えられる。保護者にも長く見ていたので話しかけられる。7年生の臨海学校に付いて行ってもいいくらいである。	(小)教員
	教務部の事務的な作業としては、やらなければならないことは同じ。小中一貫教育校として、通知表の様式や評価・評定の6年生から7年生への段差を緩やかにしようと検討している。	(中)教員
	意思決定の在り方については、毎朝打合わせをしていて、起案文書で処理すること以外に課題があった場合には、校長からの指示で副校長が動いている。起案文書は副校長も全員見て校長に提出している。	(小)教員
	開校前の準備では、実行委員会の教員が20分休みも使ってよく打合せをしていた。中学校の分掌には特別活動部がないので、中学校の分掌のどこに重なるか、組織をどうするかについて実行委員会で話していた。特別活動部が決まったのは冬ぐらいだったかと思う。	(小)教員
調整で苦労した部分として、企画を立てるだけでは通らない。やってもらう学年や関連する学年、各部署の教員にも知ってもらわなければならない。それぞれからいろいろな声が返ってくる。	(小)教員	

検証項目	内容	対象者
小中一貫教育校の校務分掌組織	準備段階の苦労として、時間の調整が何より大変だった。初年度はすでに年間計画ができている中で会議の設定をしなければならない。結局4時過ぎからの話し合いだが、なかなかまとまらない。月1回ぐらいの企画委員会があった。中学校の教務主任と小学校の教務主任が日程調整をした。1年間準備をした後、特に小学校では、異動で大幅に教員が入れ替わってしまった。また一から話し合いみたいになった。	(中)教員
	小中一貫教育校としての教務主任は小学校籍の教員が勤めている。二人で調整してから管理職に相談した。互いのことを知らないと計画ができない。小学校のことを知らなかった。どういう思いで何を大切に、何を目的にやっているのかが互いに分かると、じゃあ9年生の進路指導における面接時には、今後予定を入れないようにしようとかができる。1年間やってみて、運動会も一部学級対抗を入れるようにして、定期考査前には予定を入れないとかの調整をしていった。開校時には準備が間に合わずに見切り発車した部分がある。	(中)教員
	副校長3人の体制について、教務、進路指導、生活指導と副校長の担当が分かれていても、小学校籍の副校長に生活指導の相談をしても副校長によって回答が違ってもあり戸惑う。最終的には副校長同士で相談してもらったりした。各期の担当はあるが、1期の副校長はどれだけ小学校や中学校のことを理解できるかが課題である。	(中)教員

大泉桜学園の検証に関するヒアリング（検証ヒアリング） 児童生徒・学校関係者対象

9年間を見通した教育課程による学習指導および生活指導の充実

項目	内容	対象者
9年間を見通した学習指導および生活指導	他の中学校に比べて、勉強もよくみてもらっていると思う。穏やかな子供たちが多い。みんな優しいし、このままでいいと思う。むしろ親の方が違和感を感じているかもしれない。	学校関係者
	開校前、子供が小学校から中学校へ進学した時、小学校の先生と中学校の先生は大きく違うと感じた。中学校の先生は子供たちに任せるが、小学校の先生は細かくみられる。	学校関係者
	小中一貫教育校になり、中学校の先生も小学校校舎に来てくれて、先生の雰囲気も変わった気がする。6年生になったら、いろいろと任せてみてもいいと思う。	学校関係者
	開校前と比べて小中学校の両方の先生に協力してもらえる。	学校関係者
	1年生から9年生まで一緒にいて先生は大変だと思う。先生方も一生懸命やっているように見える。大泉桜学園は小中一貫教育校の条件としては一番いいと思う。	学校関係者
	開校前、子供が小学校から中学校へ進学した時、小学校の先生と中学校の先生は大きく違うと感じた。中学校の先生は子供たちに任せるが、小学校の先生は細かくみられる。	学校関係者
	小学校と中学校では先生の言葉づかいが違う。小学校の先生は丁寧語が多い。中学校の先生は丁寧語を使わないこともある。	児童生徒
4 - 3 - 2の区切りの考え方	7年生の立場はあいまいな気がする。7年生の仕事が少ない。	学校関係者
	中学生になる時は標準服が楽しみだった。生徒手帳とかランドセルがスクールバッグに変わることも同様だった。	児童生徒
	開校時の5・6年生は、班長になるのを楽しみにしていたけど、それがなくなった。	児童生徒
	他の学校だと中学1年生が一番下の学年で心配もあるが、ここでは先輩も後輩もいて心強い。	児童生徒
	開校時の4年生は、東校舎でいきなり最上級生になった。いい経験になった。	児童生徒
	読み聞かせやたてわり班の班長も4年生がやることになって大変だったけど楽しかった。	児童生徒

小学校から中学校への円滑な移行による安定した学校生活

項目	内容	対象者
5～9年生が同一校舎で生活	他の学校だと中学1年生が一番下の学年だが、7年生だと5・6年生がいるので緊張感をもったりお手本にならなければと思ったりする。	児童生徒
	5・6年生で西校舎に行けるのは嬉しかった。	児童生徒
	西校舎は、階段の高さも違って大人になった感じだった。	児童生徒
	中学校の先生は慣れてないと怖かった。	児童生徒
	5・6年生で中学校の先生と、7～9年生で小学校の先生と話すことは結構ある。	児童生徒
	開校前は、中学校には怖い先輩が多いと思っていた。	児童生徒
	開校前は壁一枚で別世界だった。やっていることが違うと思った。	児童生徒
	開校前は雰囲気が暗いと感じた。20分休みに何も音が聞こえてこなかった。	児童生徒
	開校した時、6年生として西校舎に移り、いきなり中学生と一緒にになって恐怖だった。9年生は体も大きかった。	児童生徒
	開校した時、中学生とすれ違うたびに緊張した。知っている人でも、近所で見ると大人っぽく感じた。	児童生徒
	開校前に感じていた雰囲気と比べて、同級生のお兄さんとかが優しくしてくれてうれしかった。	児童生徒
	外から見ると静かだけど、中は賑やかだということが分かった。	児童生徒
	小学校の時も鍵を取りに行く時などでは職員室に行っていたが、職員室が一つになっ	児童生徒

項目	内容	対象者
	た今の方が緊張感はある。	
	小学校の先生は(職員室の)奥の方に座っていて呼べなかった。	児童生徒
	小学校でお世話になった先生に「頑張っているね」と言われるとうれしい。すれ違った時に軽いおしゃべりができるのはうれしい。	児童生徒
5・6年生の一部教科担任制、50分授業	教科担任制とか他の学校と違うことが自慢できる。	児童生徒
	開校前にプレ7年の授業として50分の授業を受けた時、50分はこんなに長いのかと思った。	児童生徒
	小学生なのに50分授業は面倒だった。	児童生徒
	まだ小学生なのに何で50分なのかと思った。	児童生徒
	50分授業はやっているうちに慣れた。	児童生徒
	もう50分授業だと自慢ができる。休み時間が10分あって次の授業の準備もできる。	児童生徒
	50分授業は面倒くさかったが、今はあまり感じない。	児童生徒
小中教員の協力体制	開校前に比べると、とても大きな違いがあった。以前は小学校時代のトラブルなどの情報提供があまりなかった。小中一貫教育校になってからは、小学校時代の情報がきちんと共有されてすごく良くなった。	学校関係者
	小学校からトラブルが続く子供がいた場合も、それを踏まえて対応できている。一般的に個別の対応が必要な子供は、小中学校間の引継ぎとしてケース会議が開かれることはあるが、それは稀である。本校は学校の対応がつながっているので、子供自身も中学校に上がる不安がなく、保護者も改めて話す必要がない。そういう意味で小中一貫教育校という仕組みはとてもいいと思う。	学校関係者

幅広い異年齢集団による豊かな人間性・社会性の育成

合同学校行事	運動会で小学生の競技を見るのは面白かった。いいところが多い。	児童生徒
	運動会では小学生も中学生を全力で応援して学校が一丸となっていると実感できる。	児童生徒
	小学生の競技を見て、これやったなあと懐かしくなる。部活動の後輩の応援とかが楽しい。	児童生徒
	運動会が一つなので、兄弟姉妹が多い家は保護者が楽になる。	児童生徒
	小中一貫教育校なのだから2年生と7年生の合同競技とかがあった方がいい。	児童生徒
	小中一貫教育校になったことについて、開校当時の中学校の先生は結構ぼやいていた。特に運動会である。小中一貫教育校になってよかったという話は聞かない。先生もつい言うってしまうのだと思う。	学校関係者
	小中一貫教育校になって賑やかになって明るくなったと思う。悪くはない。だいが慣れた。桜祭も人数が少なくてかわいそうだったので小中一貫教育校になってよかった。子供にマイナスということはない。特に小学生にとってはよいと思う。中学生にはあまり影響がないのではないかと思う。	学校関係者
	保護者が感じていることとして、卒業式は別の方がいい。複数学年だと泣けない。泣く場面がない。親は感動して泣きたい。合同の入学式は、ほほえましくて受け入れられる。	学校関係者
	開校前の運動会では、人数が少ないから走ってばかりで大変だったが、運動会も中学校では学級対抗がいい。9年生のムカデ競争はとても盛り上がる。	学校関係者
	小学校は劇をやりたいとか、小さい子を連れて会場まで行くのが大変という声はあるが、桜祭は一緒になってよかった。	学校関係者
	小中一貫教育校になってなくなった行事を惜しむ声はある。どちらかといえば中学校寄りの学校づくりなのかとも思う。シェリ祭りがなくなった。小学校と中学校のどちらに比重をおくかで変わってくる。	学校関係者
	運動会は小中一貫教育校になって、中学生が活動する分、余裕ができたような気がする。桜祭はまだ行ったことがないが、すごくいいと聞いている。劇がなくなったのは残念だが音楽だけでもいい。開校前の中学生だけの時は、広いホールががらんと寂しかった。舞台には20人位で、声も届かなかった。	学校関係者

項目	内容	対象者
合同学校行事	学校行事の関係は、活気が出てよかった。	学校関係者
	運動会や桜祭は思った以上のものだった。こういう行事なのかとびっくりした。大きい子が小さい子の面倒をよくみている。これなんだと思った。今までの学校行事では、子供たちは自分のことで精一杯だった。	学校関係者
	卒業式については、小学校の卒業式が中学校の卒業式に近付いているのではないかと感じた。上に引っ張られているようなイメージがある。	学校関係者
	運動会については、小さな子から自分より大きな子までが一緒になっている。大きい子が小さい子の面倒をみている。6年生が面倒をみるより、7年生が面倒をみる方がいいと思った。6年生ではあそこまでできないのではないかと思う。7年生は中学生としては一番下だが、よく面倒をみている。私は大賛成である。	学校関係者
異学年交流・たてわり活動	先輩たちがいい見本になっていた。全部が見本だった。飯盒炊さんとかは教えられっぱなしだった。	児童生徒
	先輩を見ていることは役に立つと思う。	児童生徒
	7年生から入学した者としての印象は、小中一貫教育校なのに他の学年との交流が少ないと思った。校舎が同じでも後輩を誰も知らないのでも声がかげられない。交流は運動会や桜祭ぐらいしかない。部活動や児童生徒会の活動で少し知り合えた。部活動は7年生以上がメインなので、5・6年生はクラブ活動に集中した方がいいと思った。	児童生徒
	先輩に対等の言葉遣いで話していて、敬語を使うように言われたことがある。	児童生徒
	大泉桜学園のいいところはあいさつだと思う。	児童生徒
	小学生のうちから中学生と交流できる。	児童生徒
	小中一貫教育校なのに9学年一緒の行事が少ない。シェリ祭り(以前、大泉学園桜小学校でやっていた文化的行事)をやりたい。学級も団結できるし学年の交流にもなる。楽しかった。	児童生徒
	8・9年生の飯盒炊さん参加がなくなった。行事の数を増やして欲しい。	児童生徒
	ふれあい給食はPRすべきだと思う。回数を増やしたい。できるだけ離れた学年と一緒に給食を食べたい。	児童生徒
	小さい子と何を話しているのかわからないから交流給食は緊張すると子供は言っていた。早く給食が終わってくれと思って食べていたと言っていたが、だからよくないということではないと思う。その緊張する気持ちや小さい子と何を話そうかという体験が大事だと思う。	学校関係者
	学校内で仲がいいのは長所だが、先輩への緊張感がないのは短所にもなる。	児童生徒
	先輩に敬語を使わないことがあるし、後輩から対等の言葉遣いをされることもある。	児童生徒
	私は対等の言葉遣いの方がいいから気にならない。	児童生徒
	最初はガチガチだけど、優しい人だと分かると対等の言葉遣いになってくる。	児童生徒
	ずっと敬語だとちょっと困る気がする。	児童生徒
	敬語じゃなくてもいいが礼儀は必要だと思う。	児童生徒
	敬語を使わない言葉づかいについては、高校に行った時に困るのではないかと思う。	児童生徒
	先輩後輩の仲がいいのはいいところだが、やり過ぎはよくない。ある程度意識できれば対等の言葉遣いでもどちらでもいい。今の状態なら大丈夫である。	児童生徒
	ひどい言葉使いをしている人はそんなにいないから大丈夫だと思う。	児童生徒
小中一貫教育校が開校し、子供たちが新しい体験をできるのはいいことだと思う。	学校関係者	
5・6年生からの部活動	6年で部活動に入れたのは大きかった。先輩となじめる。	児童生徒
	部活動で5・6年生から中学生と関われるのはいいが、6時ぐらいまで練習するので保護者からは心配された。	児童生徒
	6年生から部活動でバドミントンをやっている。1年間やっただけでも、次の年に7年生から入ってきた人との差が大きかった。小学校からやっていると伸びると思う。	児童生徒
	部活動などで小学生と中学生が親しくなると、上下関係があまりなくなる。他の中学校では上下関係は厳しいが、この学校では友達みたいである。他の中学校へ進学した時は、雰囲気の違いを大きく感じるのではないかと思う。	児童生徒

項目	内容	対象者
5～9年生による児童生徒会活動	5年で児童生徒会に入り、先輩が大きな存在だった。	児童生徒
	児童・生徒会の活動が一緒なのはいい。5・6年生がいると明るい雰囲気だし、意見も活発になる。	児童生徒
	児童生徒会役員会は5・6年生の意見も聞けていい。	児童生徒

地域社会との連携による学校と地域社会の活性化

P T A 組織における小中連携	桜連絡会は、今年初めて小中合同の役員会をやった。概ねうまくいっている。桜祭のような行事にも小中学校の保護者が一緒に関わっている。	学校関係者
	保護者会の活動に理解ある方と理解のない方との差が広がっているのは、小中一貫教育校も同じである。活動に関わらない方は、学校が好きな仲間だけが何かやっていると見ているのかもしれない。	学校関係者
	大泉桜学園の保護者は、全体的におとなしい感じの人が多く、他の小学校から入ってくる保護者を仲間に入れられないということはないが、出身小学校が同じ者同士で固まってしまうということはある。	学校関係者
	大泉桜学園の保護者が団結しているので、他の小学校から入った保護者は、同じ小学校同士となりやすい。桜連絡会の役員になったことで知り合いが増えた。中学生の保護者はなかなか学校には来ない面がある。	学校関係者
	桜連絡会は、開校当時は小学部、中学部は別々に活動していた。合同役員会はあったが、その他は別だった。徐々に距離が縮まり、今は全て一緒に活動している。行事の役割分担もできないことを補い合っている。中学部は、以前はあまり部会の活動がなかったが、小学部に合わせて活動することが増えた。小学校のPTAでやっていたことを中学校の保護者も一緒に活動するので大変になったかもしれない。	学校関係者
	開校当時のPTA活動は、小学校と中学校で組織も会費も違っていたので、大変だったようだ。小学校と中学校の先生が違うように、小学校と中学校の親も違うのかもしれない。集まる時間も小学校は午前中だが、中学校は夕方とか土曜日とかであった。	学校関係者
小中一貫教育校と地域との連携	この地域は、以前は事実上、小学校と関わる町会と中学校と関わる町会で何となく分かれていた面があった。避難拠点運営連絡会も小中学校で別々にあり、どちらに関わればいいのかという状況があった。今は学校が一つなので避難拠点運営連絡会も一つになり、関わりやすい。	学校関係者
	開校に向けているいろいろな意見はあったが、今はない。いい方向に動いていると思う。	学校関係者
	青少年育成地区委員会からみると、小中一貫教育校になっても大きな変わりはない。	学校関係者
	先週、町会の運動会があって桜学園の1～4年生にもチラシを配って何人も来てくれた。ラジオ体操をやったが、みんなきちんとやるので驚いた。学校の先生が一生懸命教えているからではないか。いい子ばかりである。	学校関係者
	町会の祭りでも、何年前までは生徒の様子に問題はあったが、最近は言うことを聞く子供が多くなった。大泉桜学園の吹奏楽部にも参加を頼んでいる。吹奏楽部が来ると家族も見に来てくれるので盛り上がる。	学校関係者
	小中一貫教育校ができる話を聞いた時、ちょうどいいと思った。大泉学園桜中学校が廃校になるのではないかと心配していた。小中一貫教育校にするとすれば、練馬区が力を入れて、街もよしてくるのではないかと考えた。話がきた時は、すぐに賛成した。	学校関係者
	町会としては賛成だったが、親としてはなぜ小中一貫教育校にするのか心配だったのではないと思う。大泉桜学園も区界で三つの方向に住宅地がないから、条件的に子供が集まりにくいと思う。部活動も増え、小中一貫教育校にしてよかった。	学校関係者
	町会としては、大泉桜学園以外にも他の小学校、中学校との関わりがある。大泉桜学園は一つの学校として小学校のことも中学校のことも分かる。	学校関係者
	町会としては、一つの学校となった方が関わりやすい。	学校関係者
地域の町会として学校を支援しようという姿勢でやってきた。開校前は避難拠点運営連絡会など、小学校、中学校はそれぞれ町会で分担していた面があった。小中一貫教育校になり、一緒にやるようになった。	学校関係者	

項目	内容	対象者
	町会としては、大泉桜学園が区内初の小中一貫教育校としてモデルケースになる、いい学校にしたい、何か協力できることはないかと考えた。反対はしていない。もともと行政に対しては一貫して協力してきた。	学校関係者
	小中一貫教育校が開校して、町会同士が顔を合わせることが多くなった。大泉桜学園のおかげで町会同士の風通しもよくなった。学校と一緒に地域も一緒になった。小中一貫教育校になったおかげで、地域としてもスムーズになった。大泉桜学園はモデル校であるので、学校から要望があれば協力する。	学校関係者
	練馬区からも子供を巻き込んだ防災活動をしてほしいという話がある。避難拠点運営連絡会の活動も会場は学校である。学校とのやり取りもスムーズになった。	学校関係者
	本校の子供たちは地域の祭りに親と来る。商店会の祭りにも大泉桜学園の生徒もよく来るが、大騒ぎするようなことはしない。	学校関係者
	吹奏楽部が地域で発表してくれると、地域で元気が出る。地域は学校が中心である。	学校関係者
	町会役員は高齢の人が多い。町会の祭りなどに大泉桜学園の子供たちがさらに参加してくれるといい。	学校関係者
	3校連絡会では、大泉特別支援学校からすごく感謝される。中学生のボランティアなど、特別支援学校の生徒たちがとても楽しみにしていると言われて嬉しい。	学校関係者
	地域の野球クラブとしては大泉桜学園の校庭を使わせてもらって大変助かっている。	学校関係者
	主任児童委員として関わる件数については、開校前後でそんなに変わらない。直接、保護者にお会いして話す場合と様子を見る場合がある。どちらの件数も小中一貫教育校になったことで変わったわけではない。	学校関係者
	小中一貫教育校しか知らない保護者が多くなってきた。今の学校の状態が当たり前と思っている。地域も最初は戸惑っていた。	学校関係者

施設整備における効果と課題

施設整備	開校時に小学校と中学校の校舎の間にあった通路のしきりがなくなった。前からなぜ通路を活用しないのかと思っていた。小学校から中学校へ行くのに、いちいち靴をはいて外を回っていた。開校して6年生の教室が西校舎に移って、小学校と建物がつながっていることが分かった。	児童生徒
	技術室とか多目的室とか教室移動が増えた。	児童生徒
	子供たちはひろばや学童クラブ以外の遊び方を覚えると来なくなる。小中一貫教育校になる前は、当時の家庭科室(今のランチルーム)を使っていたので、机を片付けてマットを敷いて準備が大がかりだった。開校後は専用の部屋が用意されている。	学校関係者
	開校前は小学校と中学校の間の扉は開いていなかったが、つながってはいると思っていた。保護者会の役員同士の交流はあったが、子供たちの交流はなかった。	学校関係者
	校舎が分かれていると中学校は別の世界になってしまっていた。	学校関係者

小中一貫教育校の仕組みに関する諸課題

通学区域	小学校は他の小学校でまわりの友達はこの中学校を選んだが、中学校の通学区域が大泉桜学園だった。家から近いのが一番で、友達をつくれればいいと考えて大泉桜学園に入学した。こじんまりした少人数制の中学校が好きだった。先生が全員の子供と親の名前を覚えていた。	学校関係者
	他の小学校から7年生の時に大泉桜学園に入学した。通学区域だった。新しい友達をつくりたかったし、小中一貫教育校に興味があった。小中一貫教育は他の学校では味わえないからだった。	児童生徒
	7年生から小中一貫教育校に進学することについて途中から入りは辛いということは全然ない。何の抵抗もない。すぐ友達ができた。保護者が心配するほどのことではない。	学校関係者
学校選択制度	大泉桜学園は部活動が少ないから他の中学校を選ぶという人は多い。特に文化部が少ない。普通に入って普通に楽しめる部活動が少ない。陸上部や卓球部、パソコン部	学校関係者

項目	内容	対象者
	などがない。中学校イコール部活動と考える保護者は多い。保護者も子供も部活動と友達で学校を選んでいる感じはある。小中一貫教育校かどうかは気にしていない。	
	練馬区として9年間を一貫した教育をねらっているのであれば、私立受験者は別としても、原則として9年間在籍してもらおうというようにしてもよいのではないか。7年生からほとんど入ってほしいということなのであれば、小中一貫教育校とはいっても、小学校と中学校があるという感じになると思う。	学校関係者
	野球クラブに入っている子供は、大泉桜学園の野球部員が少ないため、中学校の選択に非常に迷った。アクティブな子供ほど部活動の比重は大きい。	学校関係者
	大泉桜学園は小規模校で人数が少ないから埋もれずに活躍できる。イメージはよくなっていると思う。部活動が少ないのでやりたい部活動がある子供は、他の中学校を選ぶ場合があることが課題だ。	学校関係者
情報発信	他の小学校に通っていた時には、大泉桜学園の情報はなかった。大泉桜学園のことを何も知らないまま入学した。	学校関係者
	いろんな人から大泉桜学園はどうかと聞かれる。いい学校だと言うが、他の中学校に行ってしまう。他の小学校と大泉桜学園の学校行事が重なることが多く、大泉桜学園を見に行けなかった。せめて見に行く機会をつくった方がよい。	学校関係者
	小学校と中学校が一緒になっているということ以外に学校の細かいところについては、外の人間には分からない。いい話は聞こえてこないが、悪い話は聞こえてくるものである。9年間、同じメンバーでは嫌だという人もいる。マイナスのイメージを一度もつと、ずっと引きずってしまう。	学校関係者
小中一貫教育校の印象など	子供たちは帰り道で会うと元気に挨拶してくれる。以前より挨拶が増えたと思う。	学校関係者
	中学生も小学生が見ていると悪いことはできないと思う。見られているという自覚があるのではないだろうか。	学校関係者
	開校前に一番心配していたのは、低学年と高学年が一緒について悪い友達になると困ることだった。今のところ、そういうことは全く聞いていない。	学校関係者
	ひろば事業のさくらっ子まつりでは、280人くらいの子供が参加している。中学生が手伝いに来てくれている。机の準備などもすごく速い。さくらっ子まつりは自分たちが遊ぶところであるのに対して、シェリ祭りは自分たちが中心になってつくるので子供たちは楽しみにしていた。	学校関係者
	学校応援団のクリスマスコンサートには、吹奏楽部が参加してくれている。	学校関係者
	子供が中学に入った時に小中一貫教育校の話が出た。当時は学校との関わりはあまりなく、ああそうなのだというくらいの感想だった。勤めている保護者としては、兄弟姉妹の通う学校の行事が一緒になり、先生との話も小中一緒で有難い。利便性が高まるという方が大きかった。	学校関係者
	小中一貫教育校になり、下の子供は上の子供と一緒に喜んでしたが、上の子供は面倒という感じだった。保護者としては、リスク管理として、地震などの時は必ず下の子供を連れて帰るように上の子供に言っていた。	学校関係者

3 小中一貫教育校の施設整備に関するアンケート

1 調査概要

調査期間 平成 27 年 5 月 27 日～ 6 月 26 日

調査票送付先 105 校（うち 13 校から施設一体型一貫校ではない旨回答あり）

小中一貫教育全国連絡協議会資料や自治体ホームページなどから施設一体型小中一貫教育校と推察される 105 校に各教育委員会を通して調査票を送付した。

回答数 64 校 大泉桜学園を含めて 65 校で集計

2 学校規模

児童生徒数	270 人以下	23 校	1 学年平均 30 人以下
	271 人～540 人	15 校	1 学年平均 30～60 人
	541 人～810 人	14 校	1 学年平均 60～90 人
	811 人～1080 人	7 校	1 学年平均 90～120 人
	1081 人以上	5 校	1 学年平均 120 人以上
	無回答	1 校	

3 小中一貫教育校開校に伴う学校施設の設置状況

新設・全面改築（31 校） 既存の校舎を改修（24 校） その他（10 校）

4 校舎と主な使用学年

1～9年で同じ校舎を使用	28 校
1～6年、7～9年で区切り	13 校
1～4年、5～9年で区切り	7 校
その他	15 校
無回答	2 校

5 学校施設について

【プール】

(1) 整備数 なし（2 校） 1 つ（34 校） 2 つ（26 校） 外部利用等（3 校）

(2) 温水プール（6 校）

(3) 水深の調整方法

床可動式（9 校） 水位調整（22 校） すのこなどによる調整（8 校）

(4) 共有している場合、時間割調整などで工夫していることや課題など（複数回答）

9 学年分の水泳授業の時間割調整が困難（16 校）

9 学年同時期に水泳授業を実施することが困難なため使用時期を分散（11 校）

9 学年の身長差が大きいため、水位調整に時間がかかる（10 校）

9 学年の身長差が大きいため、水位調整で多くの水を使用する（8 校）

複数学年で同時に使用することがある（15 校）

特に問題はない（9 校）

- (5) 共有している場合、共有のメリット（複数回答）
 1つのプールを全教員で管理すればよいので負担軽減になる（18校）
 プールの維持費（水道代・薬代など）の節約につながる（31校）
 複数学年で使用する場合、監視する教員の数が増える（15校）

【体育館】

- (1) 整備数 1館（30校） 2館（34校） 無回答（1校）
- (2) 複数ある場合、使用学年の区分
 1～6年、7～9年（24校）
 1～9年（3校）
 1～9年、1～2年（2校）
 1～4年、5～9年（1校）
- (3) 共有している場合、時間割調整などで工夫していることや課題など（複数回答）
 9学年分の体育授業の時間割調整が困難（14校）
 バasketボールの高さなどは調整可能（19校）
 使用する体育器具が異なるため、器具の準備に時間がかかる（4校）
 使用する体育器具が異なるため、器具の管理・整備が大変（6校）
 複数学年で同時に使用することがある（20校）
 共有しているが、十分な広さがあり、特に問題はない（13校）
- (4) 共有している場合、共有のメリット（複数回答）
 学級数・児童生徒数が少ないので1体育館で十分である（15校）
 1体育館にしたことで体育館が広くなり、多様な使い方が可能である（11校）
 体育館の維持費（電気代など）の節約につながる（10校）
 体育器具などを小中で融通しあえる（20校）

【校庭】

- (1) 整備数 1面（35校） 2面（30校）
- (2) 夜間照明設備あり（23校）
- (3) 複数ある場合、使用学年の区分（1～6年、7～9年など）
 1～6年、7～9年（18校）
 1～9年（4校）
 1～2年、3～9年（1校）
- (4) 共有している場合、時間割調整などで工夫していることや課題など（複数回答）
 9学年分の体育授業の時間割調整が困難（12校）
 小学生と中休みと中学生の体育授業がぶつかる場合、双方で配慮が必要（20校）
 1つの校庭を低学年と高学年で区切って使用している（5校）
 共有しているが、十分な広さがあり、特に問題はない（19校）
- (5) 共有している場合、共有のメリット（複数回答）
 学級数・児童生徒数が少ないのでグラウンド1面で十分である（14校）
 1面にしたことでグラウンドが広くなり、多様な使い方が可能である（10校）
 体育器具などを小中で融通しあえる（24校）

【家庭科室】

- (1) 使用学年の区分
5～9年(23校) 5～6年・7～9年(15校)
- (2) 共有している場合、時間割調整などで工夫していることや課題など(複数回答)
5学年分の家庭科授業の時間割調整が困難(9校)
調理台・被服台の高さは調節可能(2校)
調理台・被服台の高さが合わない児童がいる(11校)
特に問題はない(26校)
- (3) 共有している場合、共有のメリット(複数回答)
学級数・児童生徒数が少ないので1家庭科室で十分である(14校)
調理器具などを小中で融通しあえる(43校)

【音楽室】

- (1) 整備数 1室(22校) 2室(37校) 3室(5校) 4室(1校)
- (2) 複数ある場合、使用学年の区分(1～6年、7～9年など)
1～6年・7～9年(30校) 1～9年(5校)
1～4年・5～9年(1校) 1～2年・3～9年(1校)
- (3) 共有している場合、時間割調整などで工夫していることや課題など(複数回答)
9学年分の音楽科授業の時間割調整が困難(3校)
椅子や机の高さは調整可能(0校)
椅子や机の高さが合わない児童生徒がいる(7校)
使用する楽器が異なるため、器具の準備に時間がかかる(2校)
使用する楽器が異なるため、器具の管理・整備が大変(4校)
特に問題はない(18校)
- (4) 共有している場合、共有のメリット(複数回答)
学級数・児童生徒数が少ないので1家庭科室で十分である(12校)
調理器具などを小中で融通しあえる(17校)

【理科室】

- (1) 整備数 1室(14校) 2室(23校) 3室(24校) 4室以上(4校)
- (2) 複数ある場合、使用学年の区分(3～6年、7～9年など)
3～6年・7～9年(33校)
- (3) 共有している場合、時間割調整などで工夫していることや課題など(複数回答)
7学年分の理科実験授業の時間割調整が困難(5校)
椅子や机の高さは調整可能(3校)
椅子や机の高さが合わない児童生徒がいる(3校)
使用する器具が異なるため、器具の準備に時間がかかる(2校)
器具の種類が多くなり、器具の管理・整備が大変(9校)
特に問題はない(16校)
- (4) 共有している場合、共有のメリット(複数回答)
学級数・児童生徒数が少ないので1理科室で十分である(11校)

中学校籍の理科教員が小学校教員に実験の助言などがしやすい(17校)
実験器具などを小中で融通しあえる(20校)

【美術室・図工室】

- (1) 整備数 1室(23校) 2室(37校) 3室(2校) 未整備(2校)
- (2) 複数ある場合、使用学年の区分(1～6年、7～9年など)
1～6年・7～9年(32校)
- (3) 共有している場合、時間割調整などで工夫していることや課題など(複数回答)
9学年分の時間割調整が困難(3校)
椅子や机の高さは調整可能(1校)
椅子や机の高さが合わない児童生徒がいる(6校)
使用する備品などが異なるため、授業の準備に時間がかかる(2校)
児童生徒の作品などの保管・管理が大変(4校)
特に問題はない(26校)
- (4) 共有している場合、共有のメリット(複数回答)
学級数・児童生徒数が少ないので1室で十分である(16校)
中学校籍の美術科教員が小学校教員に助言などをしやすい(16校)
備品や材料などを小中で融通しあえる(19校)

【図書室】

- (1) 整備数 1室(37校) 2室(23校) 3室(5校)
- (2) 共有している場合、時間割調整などで工夫していることや課題など(複数回答)
9学年分の図書室利用授業の時間割調整が困難(4校)
椅子や机の高さは調整可能(0校)
椅子や机の高さが合わない児童生徒がいる(8校)
複数学年で使用する場合、使用するコーナーを分けている(8校)
使用する図書が異なるため、図書の管理・整備が大変(9校)
特に問題はない(17校)
- (3) 共有している場合、共有のメリット(複数回答)
学級数・児童生徒数が少ないので1図書室で十分である(12校)
蔵書の管理がしやすい(21校)
小中一緒の図書室で蔵書が増え、児童生徒が読む本の選択肢が増えた(31校)

【保健室】

- (1) 整備数 1室(36校) 2室(28校) 3室(1校)
- (2) 複数ある場合、使用学年の区分(1～6年、7～9年など)
1～6年・7～9年(18校)
1～4年・5～9年(1校)
1～9年(4校)
- (4) 共有している場合、工夫していることや課題など(複数回答)
低学年と高学年の相談コーナーを分けている(9校)

プライバシーに配慮したつくりをしている（15校）

(5) 共有している場合、共有のメリット（複数回答）

学級数・児童生徒数が少ないので1保健室で十分である（8校）

1保健室に養護教諭が2名いるので、さまざまな対応がしやすい（27校）

薬品等の管理がしやすい（15校）

【職員室】

(1) 整備数 1室（58校） 2室（7校）

(2) 複数ある場合、使用学年の区分（1～6年、7～9年など）

1～6年・7～9年（3校）

1～4年・5～9年（1校）

(3) 共有している場合、工夫していることや課題など（複数回答）

9年間の区切りに応じて教員の座席を配置している（51校）

9年間の区切りに応じて管理職の座席を配置している（22校）

小・中学校別や学年団でも話し合えるスペースを設けている（23校）

(4) 共有している場合、共有のメリット（複数回答）

小・中学校教員の相互理解が進む（53校）

教職員全体で児童・生徒を見守り・指導することができる（46校）

行事などに学校全体で取り組む体制が整いやすい（43校）

【その他の小中共有スペースがありましたらご記入ください】

ランチルーム（29校）

多目的教室（35校）

多目的ラウンジ（5校）

6 小中一貫教育校設置に伴い、小中の施設共有化等により施設面積が縮小しましたか

縮小した（26校）

ほとんど変わらなかった（13校）

交流スペースの設置等により増大した（17校）

7 小中一貫校の施設整備に関して課題と思われる点、お気づきの点など

・児童・生徒の行動観察において、学年区分（ステージ）への帰属意識と校舎のゾーニングとの間に明らかな関連性が見られています。小中一貫教育の学年区分の構成と校舎のゾーニングの間には密接な関係があり、両者を一致させることが施設一体型校舎の計画における基本的な考え方とし、校舎を児童のアクセスや体格の差を考慮して東側、西側に児童・生徒の生活ゾーンを東、西側に対峙させ、中央に交流ゾーン、北側に共用ゾーン、そして南側を管理運営ゾーンを配置することで児童と生徒及び教職員が一定の距離を置きながらも互いを意識し、「見る見られるの関係」をつくる必要があります。

・子どもたちが学年区分（ステージ）の進行に伴って自らの成長が実感できるように、各学年フロアの平面構成や教室環境に変化をつけるなど、施設面から子どもたちの成長段階を演出する

工夫が必要です。各学年フロアは小中一貫教育の運営における最も基本的な事項であり、各学年区分の教育内容や運営方法の特徴の違いにふさわしい教室の構成・施設機能を整える必要があります。

- ・本校は施設一体型のため、今までの小学校ではそれがスタンダードだと思ってしてきたことが中学校籍の教員にとってはイレギュラーであったり、単体の中学校では周知しなくてもできることが小学校籍の教職員にとっては理解されていなかったりすることがあった。その解決方法として、本校では学園運営部を中核とし、施設の使用方法や割り当て等も含めてどのようなバッキングや負担が起こるのか、なぜそのような取組が必要とされてきたのかといったことについて事細かに話し合い、確認し合い、互いを理解し合うようにしている。
- ・教室移動時に異校種の教室前の階段を使用せざるを得ない場合がある。休憩時間が異なるため神経を使う必要がある。(時間帯による動線の検討。)
- ・校舎は一体型でもよいが、子どもの動線は原則重ならないような配置が望ましい。小中の時程の違い、事故防止のため。
- ・プールの水位を、プールフロアおよび水の増減で調整をしているが、手間がかかることには違いない。水位自動調整機能もしくは床の上下する機能のある新しいプールが今後必要である。
- ・児童生徒数の増加に伴い、既存の校舎では手狭になってきている。個性的なデザイン・設計の校舎のため、増改築で課題が生じている。10年・20年先の児童生徒数を見込んだ、また急増時に対応できる設備設計が必要であると感じる。
- ・小学生と中学生の発達課題に応じた運動場や保健室など設備の設置が必要であり、すべてを共有できるものではない。
- ・小中で共有すべきものと分けるべきものを、共有した際の利点、問題点を考慮しなければならない。
- ・当初は体育館、運動場は共有で支障はないとの認識だったが、実際小中一貫校がスタートすると、体育の授業時間確保に支障が生じている。

4 大泉桜学園の部活動に関するアンケート

実施時期 平成 27 年 6 月

対象者 大泉学園緑小学校出身の大泉桜学園 7 ~ 9 年生
(7 年生 12 名、 8 年生 12 名、 9 年生 14 名 計 38 名)

問 2 あなたは部活動に入っていますか

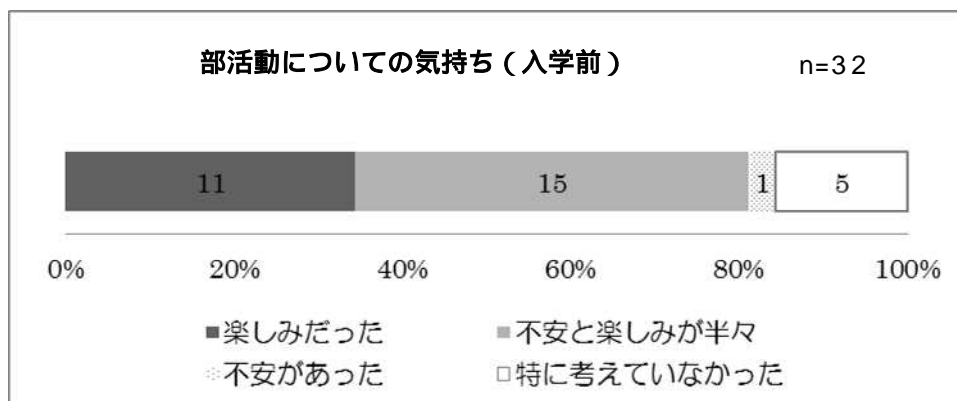
入っている 34 名 入っていない 4 名

問 3 (部活動に入っていない人に聞きます) 入らなかった理由は何ですか (はいくつでも)

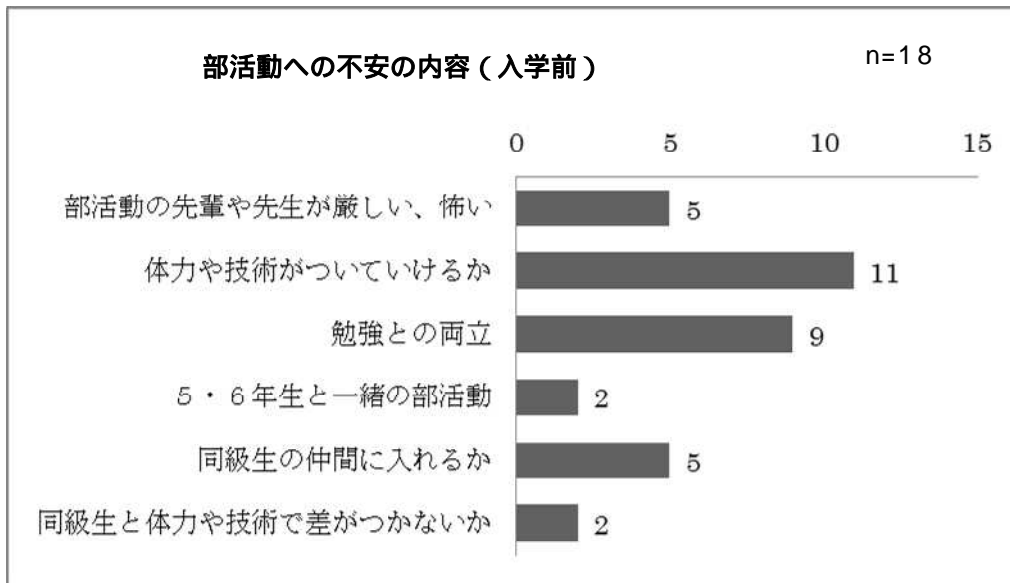
- クラブチームや習い事をしている、その活動を優先したかった
- 入りたいと思う部活動がなかった
- 体力や技術がついていけるか心配だった
- 勉強と両立できるか心配だった
- 5・6年生からすでに部活動をやっている同級生についていけるか心配だった
- 同級生や先輩たちと仲良くやっていけるか心配だった
- 部活動に興味がなかった
- その他 (何でも自由に書いてください)

最も多い回答は、クラブチームや習い事を優先したい。ほかに 入りたい部活動がなかった 部活動に興味がなかった 勉強と両立できるか心配だった の回答があった。

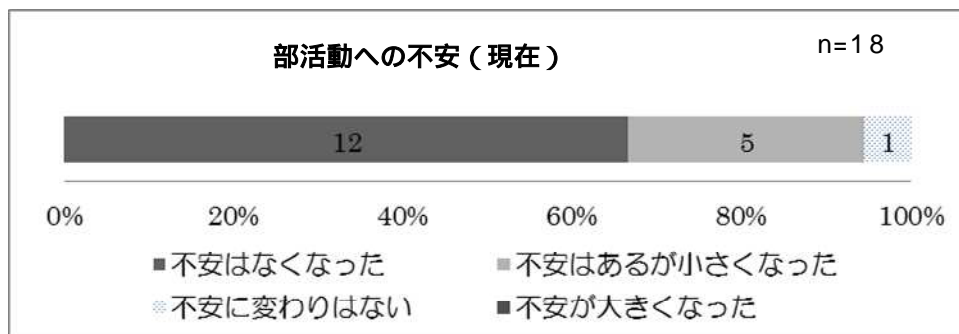
問 4 (部活動に入っている人に聞きます) 大泉桜学園に入学する前、部活動について、どんな気持ちでしたか (はひとつ)



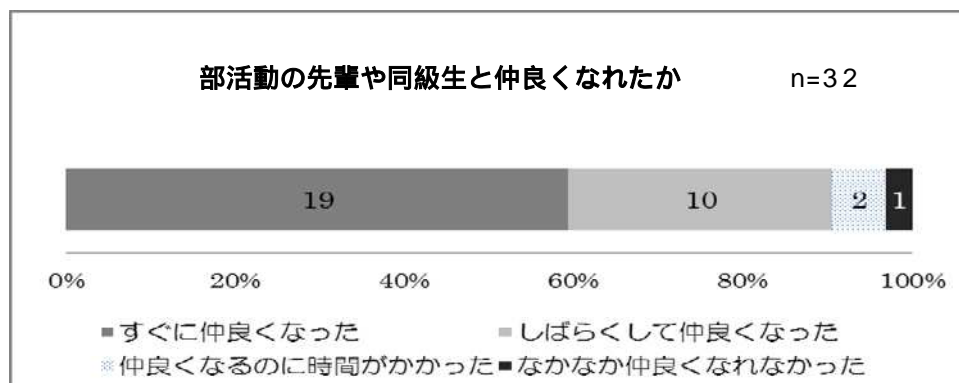
問5 (大泉桜学園に入学する前、部活動について不安だった人に聞きます)
 どんな不安がありましたか(はいくつでも)



問6 (大泉桜学園に入学する前、部活動について不安があった人に聞きます)
 問5で不安だったことについて、現在はどうですか(はひとつ)



問7 (部活動に入っている人に聞きます) 7年生で部活動に入って、部活動の先輩や同級生とすぐに仲良くなれましたか(はひとつ)



問8 (全員に聞きます)部活動について感じていることを何でも自由に書いてください

(7年生)

部活動と、勉強の両立を頑張ります。

部活動では7年生が積極的に動かないとだめだということが分かりました。

部活がとても楽しくて、入ってよかったなと思った。出来るだけ全て出たいなと思った。

部活をやっていくうちに、上手くなっていったり成功したりすると楽しくなる。また、先生が分かりやすく指導してくれるので、楽しい。

これからの部も楽しみだし、これからも部活動は続ける予定でいます。中学の勉強もがんばりたいです。なので部活と勉強を両立させたいです。

ぼくは2つの部活に入っていてたいへんだけど、楽しいので勉強と両立しながらがんばっていきたい。

初めは、部活をするとき不安があったけど、そういうのを気にせず、しっかりと練習することができてよかったです。

練習は大変だけど、これからも頑張っていていこうと思っている。

筋トレが厳しかったり、上手くできないこともあるけど、楽しく、仲良く部活に参加できています。

(8年生)

とても楽しい、けど疲れる。

忙しくてあまり行けていませんが、部活内の会話がまったくといっていいほどありません。他学年も同学年でもあまりありません。部活のことや技のことで話し合っって意見交かんがあればと思います。

部活に入って人とのかかわりがよくなったと思っております。先輩や後輩とも仲良くなれるのでよい部活だと思いました。

うまくなれた気がして楽しい。

大変だけどやりがいがある。

私は2つの部活に入っています。面白く楽しいですが、練習が多いと勉強時間が少なくなります。楽しいけれど、9年生が引退してしまって残念。

もっと活発にしてほしい。

(9年生)

楽しいし人とのこうりゅうなどがある。いろいろな人の考え方がわかる。

部活が同じ友達とは、3年間仲良くすることができ、とっても良い仲間になれます。同じクラスの友達も大切ですが苦楽を共にする部活での友達は大切だと思います。辛いこともありますが、ぜひ部活に入るべきです。

時間がたつと部活動の楽しさがよく分かりました。最初は誰でもやめたいと思う事はあります。でも、やり続ける事によって、この部活に入って良かったと思える日が必ず来ます。

勉強と両立するのは、難しいけどやっていて楽しいと思う時は、必ずあると思うので、やった方がいいと思います。

部活動中は真剣にやりながらも、時に笑いがあってとっても楽しくやれています。

同じ同級生でも、5・6年からやっている人もいて上手・下手など差はあったけど、その分、分からないことも聞きやすく良かったです。

どの部活も先輩・後輩の仲がよいと思います。

5年生から9年生で活動しているので、色々な学年の人と交流できるので部活動はよいと思います。

すごく楽しく、部員たちと頑張っているのがうれしいです。怒られることもあるけど、その全てが自分のためになっていて、大人になるために必要なことだと思います。

中学生と小学生での能力差が激しすぎて、中学生だけなら1時間で出来ることも、2・3時間かかってしまうこともある。先輩・後輩の間での敬語が皆無。

7年生になって初めてやったので最初は不安でした。でも今では今の部活に入ってよかったなと感じています。同じ部活の人といるのはとても楽しいです。

最初は楽しくて毎日行っていました。でも8年の後半で勉強との両立が厳しくなり部活に行くことが減ったなと感じます。3年間続けられる部活に入るべきだと思いました。

部活動は小学生の頃に想像していたよりも、厳しく大変なことが多いと思うし、上下関係もあるので不安になって当たり前です。楽しそう！と軽はずみに選んで入るのではなく、しっかりと家庭等で話し合って自分に合った部活を選ぶのが一番だと思います。